

旅人はどこかズレている

クロナナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リリースした頃から原神をプレイしてるんだけど、オープンワールドって実は初めてだからついついあちこち旅してしまう。

風車を登ろうとしたら何故か通り抜けて中に入ってしまったり、壁と家の隙間にめり込んだり、キャラのスキルと特定の操作でぶっ飛びだりetc…

そんなちよつとメタいゲームの話を物語っぽい感じで書いたらなあと思つて書いてみました。

何分小説とか書くの初めてなもので色々拙いところもあるでしょうがどうぞよろしくお願いします。

※この物語はゲーム内のバグや不思議な現象、他ゲームの知識が旅人が旅してきたきた異世界の知識といった妄想のようなものやストーリーの捏造などが含まれます。原神そのものの世界観を大事にしたいならブラウザバックすることを推奨します。

目次

旅人と裏世界	1
崖を登るには…	5
旅人と非常食	10
パイモンと夢の中 そのいち	15
旅ズレ短編集	22
パイモンと夢の中 そのにのいち	27
パイモンと夢の中そのにのに	32
パイモンと夢の中 そのにのさん	39
旅人とパイモンの出会いの話	45
旅ズレ短編集 そのに	49
旅人と風魔龍事変 そのいち	53
旅ズレ短編集 そのさん	58
タルタリヤと夢の中	63
旅ズレ短編集 そのよん	71
旅ズレ短編集 そのご	75
おいでませ弊ワット その1	80

旅人と裏世界

ここはテイワット大陸、自由と牧歌の国”モンド”。

その領地から少し離れたところを3人と1匹が歩いていた。

「なあ旅人お？こんなところまでできてどうしたんだ？この辺りの宝箱ならもう全部取っただろ？」

先頭を歩く金髪の少女”旅人”に小さな相棒”パイモン”が語りかける。けれども旅人は無言で歩き続ける。

「荣誉騎士、この先に何か危険なモンスターでも現れたのか？」

モンドを守る西風騎士団団長”ジン”も心配そうについてくる。

その言葉に旅人は足を止めて振り返る。

「モンスターじゃないよ…でも、場合によっては危険かも…」

「僕の記憶だとこの辺りは何もなかったはずだけど…一体何があるって言うんだい？」

旅人の深刻そうな返答にモンドいちの吟遊詩人”ウエンテイ”も困惑していた。

旅人は再び歩き始めると、燭台が2つある場所までやってきた。ここはかつて2つの燭台に火をつけると宝箱が出現するということがあった。

「旅人お、オイラの記憶だとこの宝箱は取ったはずだぞ？…って
おいしい！旅人おおおお?!」

旅人はパイモンを無視して目の前の崖を勢いよく飛び降りた。急に身投げをした彼女に同行者達は驚いたがすぐにバサリという音が聞こえてきた。

「風の翼を広げたようだね。てことは僕たちもついていけばいいのかな？」

「どうやらそのようだ、我々も続こう」

そう言うと2人も旅人に続いて崖から飛び降りる。普通なら助からない高さではあるが、風の翼が有ればゆっくりと降下することができる。しばらく降りると海面近くの岩肌に張り付いている旅人を見つけた。旅人は2人と相棒がついてきたのを一瞥すると、海へと入り

崖沿いに泳ぎ出す。やがて崖の隙間にできた空洞へとたどり着いた。そこには…

「これは…どうなっているんだ!？」

「海面の切れ目?なんとも不思議な場所だね?これは僕も知らなかったな」

ウエンティの言う通り、海面が途中で綺麗に切れており、そこには謎の空間ができていた。そして…

「どうかな、コレは?私たちは今、海面の下にいる。海の中に入ってる訳じゃない。息ができているからね、あくまでここは地上なんだ」

旅人は付いてきてと一言言うと海の底を歩き始める。

「海面の下、か…言い得て妙だね、でも泳いでるわけでもない、潜ってるわけでもない。僕たちは今確かにこの海の底を歩いている。とここでここで飛んだりしてもいいかな?」

「海面近くで飛んだら海上に弾き出されるよ?あ、ジン団長、そこ行きすぎると海上に弾かれます」

「そ、そうなのか?ふむ、下手に動く危険そうだ…」

旅人はしばらく歩き続け、一際深くなっているところで翼を広げ、また歩き続ける。やがて海面が近いのだろう、石畳やら倒れた石柱やらが出てきたあたりで今一度立ち止まり、やがて一歩踏み出す。次の瞬間彼女は突如として海面の顔を出して泳ぎ始めた。これが彼女の言っていた”弾き出される”と言うやつなのだろう。そうしてたどり着いた場所は地図には載っていない小さな孤島であった。

「あれ?…ここって前に狂風のコアと戦った場所だよな?もう倒したんだし危険なことはないんじゃないか?」

「パイモン、思い出してみて?私たちは以前どうやってここに来た?」

「それは、吟遊野郎と一緒に飛んで…」その前にも一回来てるでしょ?」えっと、その時は確か、ガイアに海を凍らせて… あっ!」

そう、この孤島にたどり着くには基本的に高所から飛んでいくか海を凍らせて地道に進むかの2択である。神の目による元素の力か、類稀なる飛行センスか、どちらにしる旅人やウエンティ、ガイアなど、力と才能がある人にしかできない芸当である。

「私たちなら七天神像やマーカーを頼りに転移することができると普通の冒険者ってそれはできないでしょ？だからこそこれは危険だと思う。まあカニ漁のためだけに海を凍らせるのもガイアさんに悪いし、実際飛んだ方が早いんだけど…。それでも万が一もあるかもしれない」

「確かに危険だね。わかった、僕もなんとかできないか考えてみるよ」
そして月日が経ち、

旅人とジンは再びあの燭台のある崖へと赴いた。

「荣誉騎士、どうしてまたここに来たんだ？」

「ウエンティに呼ばれてね、なんでも対策ができたらしいから確認して欲しいんだとか」

しばらく歩いているとそこには2人の人物がいた。1人は件の吟遊詩人でありもう1人は、

「旅人、久しぶりだな。渦の魔人以来か」

「鍾離先生！どうしてここに？」

「いや何、風神に手伝って欲しいことがあると言われてな。何かと思えばなるほど、海の切れ目とはなかなか不思議なものだ。不思議だが確かに危険でもある。だからこうして埋めてやった。これでもう入ることは出来まい」

崖下を除くと確かに今まではなかった岩肌が見え完全に埋められていることがわかる。

「では、俺は璃月に戻る。また会おう」

そう言うとき鍾離はさっさと歩いて帰ってしまった。ともかく、ひとまずは安心だろう。

帰り道、パイモンは旅人に一つの疑問を投げかけた。

「なあ旅人、ほんとに埋めてしまっただけ良かったのか？不思議な感覚を味わえるのは結構楽しかったし、なんだか勿体無い気がするぞ？」

「確かに今回の切れ目はそこまで危険なものじゃない。それでも万が一があるかもしれないから、気をつけないといけない」

「それって、異世界を旅した経験ってやつか？」

「そうだね、壁を抜けたり、地面を抜けたり、溶岩に潜ったり、ゴミ箱

に食べられたり、いろいろなものを見たし経験もしたからかな?」

旅人は目を閉じてかつて旅した場所を思い返す。何か引つかかったかと思いきや壁にめり込みそのまま壁の向こう側へ抜けてしまったこと、祭壇で祈りを捧げるために座った筈なのに気がつけば地面に潜っていたこと、どうにかして溶岩に潜ったはいいが水中判定だから息は苦しくなり、出ようものなら即死するという究極の2択を迫られた人物もいた。公園のゴミ箱をあっちこっちへ押していただけなのに気がつけばゴミ箱の中に入っていた人物もいた。

「何だそれ、想像はできるが理解はできないぞ?」

「まあ、普通はそうだよ。裏世界、今回みたいなのを私はそう呼んでるんだけど。裏世界は面白いものが見れる反面、危険なものもあるからね。注意するに越したことはないだよ」

裏世界とはどんな場所なのか、どんなものがありどんな危険があるのか、旅人はパイモンに自分が見たもの、聞いたものをあれこれ説明するのであった。

「∴ まあ、急に加速したり上空に吹っ飛ぶくらいならまだ探索に役立つそうかな」

「旅人、今なんて?」

崖を登るには…

ここはテイワット大陸のとある場所。周囲には木々が茂り目の前には高い崖がある。

「さて、ここに集まってもらったのはいかに早くこの崖を登り切るか？足場や気流など工夫ができるみんなに手伝ってもらいたくてね？」

旅人はそう言うところを見据えた。そこには、

「普段は本気を出せないからね、途中までしか上げられないや」

風を操る吟遊詩人と、

「僕の疑似陽華でも途中までしか上昇できないよ？ああ、でも上昇し切る前に跳ぶと少し高く跳べるね。試してみるかい？」

岩の花をエレベーター代わりにできる錬金術師と、

「なあ、この2人と比べたら俺できること無くないか？」

炎で吹っ飛ばす不幸属性がいた。

「でもベネットのスキルならこの中の誰よりも高く吹っ飛ばす筈だよ？前にも飛んでたよね？たしか清泉町あたりだった気がするんだけど？」

旅人はそう言うがベネットはどこか不満そうだ。

「あれ見られてたのかよ。俺も何が起こったのかよくわかってないんだぞ？」

「再現しようと思えばできるんじゃないの？よく吹っ飛んで崖から落ちてるみたいだし」

ベネットの返しに旅人は再現すればいいと提案する。よくわからないことはとりあえず色々試してみれば案外再現できたりするものだ（もつとも、それに他費やす時間は膨大だが）。

「うーん、わかった。やってみるよ。行くぜ？はあああああ！」

ベネットは力を溜めると炎を纏った剣を勢いよく振り下ろす。そして…

崖とは反対の方向へスーッと飛んでいってしまった。

「あ、ベネットが飛んでいっちゃった」

「おいしい！旅人!!あれほつといて大丈夫なのか!？」

「大丈夫だよパイモン。以前吹っ飛んでいるのを見かけた時も翌日には冒険者協会の近くを歩いていたら」

「ふむ、剣を叩きつけたエネルギーが反対方向へと流れて行ったのだろうか？実に興味深いね？彼のデータも取りたくなかったよ」

「あはははは！彼すごいね？風も使わずにあんなに綺麗に飛んでいくなんて」

「オイイ！まともなのはオイラだけかあ!？」

パイモンだけがツツコミを入れる中、周りの反応はそれぞれだった。

アルベドは今起きた現象を科学的に捉えようとしていたり、ウエンティは飛んでいったことに関心を示したり、旅人は方向さえ任意に決められればなどと考えていた。パイモン以外誰もベネットの身を心配する者はいなかった。

「さて、興味深いものが見れたけど方向を任意に決められないといけないし、なおかつしつかりと着地しないとイケない。2人は何か意見はないかな？…はい、ウエンティどうぞ」

旅人の質問に対してウエンティが手を挙げる。

「これは少し前にエンジェルズシアで飲んでる時に聞いた話なんだけどね？教会のシスターが段差を飛び降りようとした際に偶然下に大型の風スライムがいたらしくて、スライムが飛び上がるのと彼女が飛び降りたのが重なってシスターは勢いよく前方に弾かれたそうだよ？幸い彼女は風の翼を持っていたからそのまま飛んで怪我とかはなかったんだけど、うまく使えば真上に飛ぶことだってできるんじゃないかな？」

「確かに、それなら乗る角度を調整するだけでなんとかなりそう。でも場所が限られてしまうのが少し残念かな」

確かにタイミングが合えばうまく飛べるだろう、しかし必要な時に風スライムがいるかと聞かれたら話は別だ。そうしてあーでもないこーでもないと話していると不意にアルベドが姿を消した。旅人たちはしばらく彼を探していたが、頭上から声がしたため上を見上げる。そこには風の翼を広げゆつくりと降下してくるアルベドがいた。

「ふむ、色々やってみるものだね。崖上までしつかりと飛べたしこれはもう完成でいいんじゃないかな?」

「あ、アル、アルベド?今何やったんだ?」

「難しいことはしていない。疑似陽華の上で剣を振ったのさ」

そう言うと彼は木の近くに疑似陽華を展開し、その上に乗った。花が上昇を始めると木に向かって剣を振り次の瞬間、ものすごい勢いで上空へと射出された。旅人はすぐさま彼と同じように花に乗り、上昇に合わせて剣を振った。しかし上空へと射出されることはなく、ただ木に剣を叩きつけた感覚だけが残った。

「あ、あれ?飛べない... 一体どうやったんだろう?」

「オイラにはさっぱりだぞ?アルベドに聞いたらわかるんじゃないか?ほら、ちようど降りてきたぞ」

「旅人、どうしたんだい?」

旅人はアルベドに問いかけた。同じように花に乗り、同じように剣を振った。しかし自分は飛べなかった。他に何が必要なのかかわからないと。

「乗るタイミング?それとも乗る角度?スライド移動はできないよ?乗せる足は左足からの方がいいかな?それとも剣を振る速度や角度?乗る前に儀式とか踊りとかしたほうがいい?」

「旅人、少し落ち着くといい、ちゃんと説明するとも」

アルベドは旅人を宥めるとゆっくりと自分がしたことを語った。

「乗り方や角度、それは特に意識しなくていい。剣で木を叩くことのできる距離であれば問題ない。次に剣を振るタイミングだが、疑似陽華の上昇が始まってからだ。そして剣で木を叩いたら即座に跳ねる。これを陽華の上昇が終わるまでに行うと...」

アルベドが剣を振る、そして彼はまたまた上空へと射出された。旅人は一度深呼吸し、彼の行動を精密に再現する。

「... こんだ!!」

かくして旅人は遙か上空へと射出された。覚悟していた強烈な空気が抵抗もなくしかし眼下にはウエンティやパイモンが豆粒のように小さく見える。

先に降下したアルベドを追い旅人もゆつくりと降下していく。下で待っていたウエンティは弓矢では無理だったと肩をすくめた。今度彼には自分自身が矢となり飛んでいく技でも教えようか。パイモンは興奮気味に旅人に近づいた。

「すごかったぞ旅人！これで探索の幅も広がるな！」

「確かにそうだね。でもきつとそこ」「そこまで長続きはしないだろう」。アルベドもそう感じた？」

「旅人、アルベド、それってどう言うことだ？」

旅人の言葉に被せるようにアルベドは言葉を発した。曰く、長続きはしないと。パイモンは納得できないと2人に疑問をぶつけた。

「パイモン、モンドから璃月までを最短で進もうとするならドラゴンスパインを必ず通るよね？」

「んん？そうだな、まっすぐいくならそんな感じの道になるな」

「でも今まではそうじゃなかった。私たちは石門を通って璃月へと向かっていった。それはなぜ？」

今でこそ七天神像やマーカーを頼りに転移できるが、最初はどこへいくのも自分の足だった。高い崖を登ったり、ひたすら泳いでたどり着いたりと色々あった。しかしまっすぐ進めばいい筈なのに何故か周り道をしなければいけなかった。それは何故か。パイモンが答えを考えていると旅人が不意に言い慣れた台詞を言う。

「またあとで来よう、今は他を探索しよう！」、そう言われて崖から落とされたこともあったっけ」

「さてさて、オイラのせいだって言うのか？この世界に来たばかりの旅人が危険な場所に足を踏み入れないように案内してるんだぞ！」

確かにその通りだ。このテイワットに来たばかりの頃の旅人ではドラゴンスパインを足を踏み入れたらきつと大変な目にあっていたことだろう。なら今は？確かに厳しい土地であるがそこまで危険とは感じていない。何故か？簡単なことだ、強くなったから。モンドで、風龍廃墟で、璃月で、黄金屋で、様々な経験を積み重ねて強くなったからだ。それはまるで、

「経験を積んで強くなって、そして探索の幅が広がる。それはまるで

物語のようだ。どこの世界でだったか、そんな感じのことを言っている人がいた気がするよ」

「それは興味深いね、新しいことを覚えたら古いことは忘れてしまうのかな？」

「そうだね、新しいことはあくまで古いことの延長線上のことだから」
だから、かつて覚えたことが出来なくなる。それは今できることの下位互換でしかなくなるのだから。

「だからそのうち、この天高く飛ぶ術も、出来なくなるんじゃないかな？」

もしくは世界の修正力が働いて、そんな言葉を旅人は飲み込んだ。

「よし、とりあえずの目標は達成したから今日は帰ろう！みんなで鹿狩りでお腹いっぱい食べよう！」

「お、いいな！オイラも賛成だぞ！」

そうして3人と1匹はモンドに帰るのだった。

「あれ？オイラたち何か忘れてるような……ま、いつか」

「ところで旅人、スライド移動ってなんだ？」

「爆弾が爆発する寸前に前転して近づいて爆発とほぼ同時に盾を構えると反対方向に延々と移動し続けるとある世界の技だよ。馬と同じくらい早いんだ」

「その世界の人間は何故それをしようと思ったんだ？」

「なんでだろうね？わかんないや」

旅人と非常食

ここはテイワット大陸最大の貿易港にして岩神の治めていた土地、契約と商人の国”璃月”。活気あふれる街の中を旅人は非常食パイモンと歩いていた。

「…今、かなり失礼な呼び方された気がするぞ？」

「…ん？気のせいじゃない？」

パイモンの疑問をさらりと受け流す旅人。勘の良い非常食め。

「それにしても璃月にくるのは久しぶりだな！鍾離と塩の魔人の遺跡を探検した時以来じゃないか？」

「そうだね、伝説任務以来かな？」

「伝説任務ってなんだ？」

「ああ、ごめん。ちよつと変な電波拾ったみたい」

旅人、認識は間違っていないがそれは我々の目線プレイヤーだ。

話を戻そう。旅人は街の中を歩き、一軒の店を目指していた。そこにいたのは、

「あ！旅人だ！久しぶりー！なにになに？ウチの料理を食べに来てくれたの？嬉しいなあ！いいよ、ちよつと待っててね？今少し取り込み中なんだ」

「旅人か、済まないが少し手を貸してくれないか？どうにも動けないんだ」

万民堂の厨房内できると回り続ける若き料理人”香菱”シャンリンと何故か同じように回り続ける往生堂の客卿”鍾離”かくけいがいた。

「わあ、珍しい組み合わせ。ところで、2人して何やってるの？」

「あのね、厨房に例のアレが出たからさ？退治しようとしたんだけど隙間とかに隠れるもんだから槍でこう、ね？」

「高所から攻めれば或いはと思っただけ、2人して試してみたらこの通りだ」

くるくる回転しながら説明する2人を見て旅人は頭を抱えた。落下攻撃をした際に何かの隙間に嵌ってしまった、身動きが取れなくなってしまうことがある。あまり頻繁に起こることではないのだが、2人

に起こっているのはまさしくソレだ。

旅人は近くのマーカーの位置を頭に思い浮かべながら2人に近づく。

「今助けるから、ちよつと槍に触れるよ?」

そう言うとき旅人は2人の槍を思いつきり掴んだ。そして、

ココナツツヒツジ

伝説の半仙の獣

—————原神tips—————

街中にあるマーカーの場所へと転移した。

「はい、これでもう大丈夫だよ」

「ありがとう旅人! 転移すればよかつたんだね!」

「転移か、なるほどそれなら確かに先程のスタックから抜け出すことができるだろう……しかし忘れていた」

香菱は旅人に礼を言い、鍾離は何やらメタいことを呟いている。3人は改めて万民堂に戻った。

「ところで旅人はどうしてウチに来たの?」

「たまたま近くで依頼を受けていてね? 敵が強くてコレの中身が空になっちゃったからさ、冒険者協会への報告帰りにちよつとここで料理の補充をさせてもらえないかと思って」

そう言いつて旅人は三〇式・携帯式栄養袋をヒラヒラと振る。この栄養袋は中に料理を詰め込むことができ、戦闘中でも即座に回復、復活ができるようになる便利アイテムである。

「いいよ、何作るの?」

「食材だけは集めてきたから、とりあえず最初に鶏肉のスイートフラワー漬け焼きを……100個、次に松茸の肉巻きを100個、キノコピザを50個に四方平和を60個かな」

「ちよつと待って流石に多くない?」

旅人の口から出た料理の量に香菱は思わず突っ込んでしまった。なにせ旅人の見せた栄養袋は、腰に付けられかつ動きの邪魔にならない程度の大きさであり、そこにそれだけの量が入り切るとはとても思わなかったからだ。

旅人は料理の手を止めずに答える。

「栄養袋に入れるのはあくまで1種類だよ？それでも足りないかもしれないから作つとかない？」

「入りきらないほかの料理はどうするのさ？」

「それはほら、こうやってアイテムリストに…。」

香菱の目の前で起こるとんでもない現象に彼女は空いた口が塞がらなかつた。目の前でありえない速度で料理をする旅人、そして出来る上がる大量の料理(何故かすでに皿に盛られている)、そして瞬時に謎の空間に収納されていく料理たち。それらはほんの数秒の間に行われた。

瞬く間に大量の料理を終わらせた旅人は一息つくと、パイモンを掴んで弄び始めた。

「オイ！コラ旅人！急にオイラを掴むな！顔を揉むな！涎を垂らすなああああ！」

「今作った料理だつて公子や犬アンドリアスころと遊んだらすぐに無くなるんだからね、そしたら最後は君だよ？パイモン非常食ちゃん」

「だからオイラは非常食じゃないって言ってるだろおおおおお!!!」

揶揄う旅人とキレるパイモン、そんなやりとりを微笑ましく見ていた香菱だが、ふと疑問に思ったことを聞いてみる。

「ところで、旅人はよくパイモンちゃんのことを非常食扱いしてるけど、なんで？」

「それオイラも聞きたいぞ、何か理由があるのか？」

途端、旅人の纏う雰囲気が変わった。

「何故…？か、これは他の世界を旅するときの話なんだけどね？」

そう言うと旅人は話し始める。とある世界を旅しているときに遭難したことがあるらしい。食料も底を尽き何か食べる物はないかと必死になつて鞆の中を漁ると、あるものを見つけた。瓶詰めにした

幽霊である。

「たまたま知り合った勇者様に教えてもらったことなただけどね？その世界の瓶って結構いろんなものを詰めることができるの。それこそクレーちゃんや七七ちゃんくらいのサイズを瓶詰めにはね」

風取りの瓶を取り出し”これくらいのサイズなのにね！”と笑う旅人。その世界の幽霊は倒すと瓶に詰め込むことができ、飲むことで体力の回復、もしくはダメージを負うのだが、どちらにしてもお腹は膨れる。

「パイモンってさ、ちょうどいいサイズなんだよね？その幽霊と同じで…」

瓶に詰めたら飲めそう、そう言う旅人はパイモンから顔を逸らしジュルリと口元を拭った。

「…なーんてね、冗談だよパイモン♪…ってあれ？」

「全力で逃げ出したね」

「パイモン！冗談！冗談だって！」

パイモンがどこかへ行ってしまったことに気づくと旅人は慌てたようにパイモンを追いかけていった。

万民堂には香菱と、いつの間にか食事を再開している鍾離の2人だけが残された。

その後旅人はパイモンに許してもらえるまで2日かかった。

「ところで鍾離さん、さっきの旅人の話はどう思う？」

「そうだな、風じ…モンドで知り合った吟遊詩人に聞いたのだが、旅人の異世界の話は信じられないことが多々あるがどれも実際にある

事らしい。目の前で再現されたら信じるしかないとのことだ
「へー、再現ねえ……………再現!?」

パイモンと夢の中 そのいち

ここはテイワット大陸のとある場所「じゃないぞ！おい！ここどこだ!」…ではなく、よくわからない空間だった。周囲にはさまざまな形状の扉が浮いており一つとして同じものはない。前後左右だけでなく上にも下にも扉があるせいで、パイモンは方向感覚がおかしくなっていた。

「旅人もいないし、とにかく合流しないといけないぞ。一体どの扉が正解なんだ…あれ？」

あたりを見渡すと、ひとつだけ半開きになっている扉を見つけた。正直なところ不安しかないが、旅人を捜さないといけないと自分を奮い立たせパイモンはその扉へと飛び込んだ。

飛び込んだ先は、深い緑色の見たことない植物や背の高い木々に覆われた場所だった。

「見たことない植物だな。やたらでかいしそれに地面もジトつとしてる。ここは沼地か？とりあえず旅人を捜さないとだな！おい！旅人おー！」

嫌な雰囲気をするその沼地をパイモンは独り、旅人を探しながら進んでいく。しばらく進んでいくと遺跡のような場所に着いた。もしかして探検でもしてるのでは？と思いい中へと進んでいく。儀式を行うかのような広い場所を抜けるとそこには、

『グルルルルウウウ…』

「わあおつきい…まるでドラゴ… ドラゴンだああああ！」

『グオオオオオオオッ!!』

緑色の肌に赤褐色の角や翼の生えたドラゴンがいた。かつてモンドで見たトワリンがイケメンに見えるくらいにはゴツく凶悪な顔をしていた。太い腕を振り上げ叩きつけてくる。パイモンはそれをなんとかギリギリで躲すことができた。次の攻撃が来る前に急いで逃げ出すパイモン。

「うへえ、死ぬかと思ったぞ。でもあの巨体じゃ流石に追いついてはこな…なんかやたら速いぞ!」

その巨体のどこからそんな速度が生み出されているのか、近くの木々や石柱を薙ぎ倒しながら追いかけてくるドラゴン。炎のブレスを吐いてきたと思ったら氷のブレスまで吐いてくる。再び振り下ろされる腕、倒れてくる石柱、逃げるパイモン。やがて広い場所へと辿り着くがその先は行き止まり。迫ってくるドラゴンを見てもうダメだと絶望するパイモン。次の瞬間、

「転んじやうかな!？」

そんな聞き覚えのある声と共にドラゴンの目の前に液体が広がる。その液体はよく滑るようでドラゴンは足をバタつかせ立ち止まった。すると、

「やあつと見つけたぞカラオン!このフェアリースターの面汚しがあああああ!」

どこからか現れた小柄な少女がドラゴンに向かって走っていく。それにしても聞いたことのある声だとパイモンは思った。そんな少女がドラゴンに向かって腕を振り上げ、

「これは私達に想いを託したカ〇ラ様の分!」

炎の腕を地面から出現させ、

「これは大切な人を奪われたシー〇ルの分!!」

連撃とばかりに氷の腕を出現させ、

「そしてこれはテメエ如きがベル〇カード様で実験した分!!」

ドラゴンの足元を爆発させ、

「そしてこれは!何度もテメエと戦わされてるワタシの分だああああ!!!」

大きな筒を抱えて氷の光線を放った。相当ストレスが溜まっているらしく、ドラゴンに対しての攻撃が苛烈を極めていた。ドラゴンの攻撃をのらりくらりと躲し次々にカウンターを当てていく様は姿こそ違えど、どこか旅人に似ている。やがてドラゴンは飛び上がりどこかへと飛んでいってしまった。そこでパイモンは、少女に近づくことにした。

「助けてくれてありがとな!オイラこのまま死ぬかと思ったぞ!」

「無事で何より、キミに聞きたいことは幾つかあるけどまだ終わって

ないから帽子の中か上にも居てくれると助かる」

少女は応えるものの目だけはドラゴンが飛んでいった方を見続けている。その視線が気になってパイモンも振り返ると、そこには先程飛んでいったドラゴンがブレスをチャージしていた。それを見た瞬間少女はパイモンを掴み全力で走り始めた。

「うわっ、何するんだ！そっちにいつても行き止まりなただけだぞ！」

「アイツの吐くブレスの色は青、来る属性は氷、攻撃の判定はあの石畳の切れ目まで！早く逃げるよ！」

少女はドラゴンに対して使っていた液体を地面にぶちまけるとそれを使い器用に加速していく。行き止まりにたどり着いた次の瞬間には、背後は一面氷の世界になっていた。

「いやあ、相変わらずギリギリだね。少しでも遅れてたら今頃ワタシ達も氷像かな？」

「笑ってる場合じゃないぞ！アイツなんか迫ってきてるぞ!!」

「うん、チャージブレスの後は対の属性ブレスで突進だね。炎だから、右に避ける!!」

すぐさま炎を吐きながら突進してくるドラゴンを余裕を持って回避する少女、氷の世界は一瞬で終わりを告げ、元の景色へと戻った。

そして再び正面から睨み合う形になった。パイモンにとっては絶体絶命だが、少女はどこかスツキリとした顔をしていた。

「アハハ！満身創痍だなあカラ○ン！もう飛ぶのも限界だろう？この一巡で倒してあげる！」

そう言うや否や拳を前へと突き出した。そして現れたのは炎の拳、そしてそのまま氷の拳、緑のフラスコを投げ地面を爆発させる。ドラゴンは腕を振り上げ叩きつけてくるが、少女は素早く避ける。

「それはもう見飽きたよ、ここまできたらテメエの負けだ！」
氷の光線を放ち、続けて青いフラスコを投げた。

「最期は派手に吹き飛ばせ！」

少女はすぐさま赤いフラスコをアイシングマスによりできたフィールドへと投げ、

「チェックメイト、ワタシの勝ちだ！」

大爆発を引き起こした。やがて光が収まると、ドラゴンは影も形もなくなっていた。跡形もなく吹き飛ばしたのだろうか。

「お、お前すごいな！あんなドラゴンを一人で倒すなんて！」

「あはは……いやいや、今回は運が良かったただだよ。ま、なんにせよ倒したことに変わりはない。街に帰ろうか。お腹が減ったよ」

「オイラも着いていっていいか？お腹もぺこぺこだしこの場所についても何も知らないんだ」

「うんうん、いいよいいよ。ワタシの知っている範囲で良ければ教えてあげよう。ワタシもキミについて色々聞きたいからね？ほら、街はあっちの方角だよ、街っていうか村かな？とにかく行こう」

そう言ってパイモンを急かす少女、少女を追いつきパイモンが少し離れた時、旅人は振り返りニヤリと笑う。

「…次は素材のためにフルレイドでくるから。よろしくね、カラオン？」

遺跡を抜け出し、沼地を歩くこと1時間、2人は小さな村へとたどり着いた。2人は適当な店へと入り、料理を片っ端から注文していく。やがて大量の料理に囲まれつつ、談笑をしていた。

「なるほど、パイモンはこことは違う世界から変な扉を通ってやってきたんだね？旅人って言う相棒を探して…」

「そうだぞ、こんな不思議な話をしているのにお前は驚かないんだな」「まあ、ワタシもタイムマシンに乗って未来からここに来たからなあ……どことなく親近感が湧くよ」

お互いの軽い身の上、互いの旅の目的、いろいろな話をしているうちにパイモンはふと少女の名前を聞いていないことに気づいた。

「そういうえば、お前の名前はなんて言うんだ？」

「さてね、名前はあった気がするけど時間転移の影響でか忘れてしまつてね、アカデミックの冒険者だからデミ子とでも呼んでくれ」

少女、デミ子は頭をぽりぽりと搔くとそう答えた。特に気にしてる様子はなかったのでパイモンは軽く謝ると話を再開した。

「しかし帰る方法かあ、時間転移で使ったタイムマシンは魔物化してしまったしこういう時にこそ役立つであろうジャ○ミンとは敵対してしまったからなあ…。」

「どんなことでもいいんだ、あやふやな情報でも怪しい話でもなんでもいいから何かヒントになりそうなことはないか?」

パイモンの口から出た言葉にデミ子は一度目を閉じると何かを思い出したのか口を開いた。

「あやふや、曖昧、時間転移、もしもの可能性に賭けることになるけどさ?失われた時間の廃墟へ行ってみないかい?そこなら何か起こるかもしれない」

失われた時間の廃墟とは、過去と現在が入り乱れた不思議な空間になっていく廃墟だ。過去で起こしたことを現在に引き継ぐことで道を切り開いていく場所なのだが、

「とはいえ、魔物が出る大変なギミックがあるわでなかなか危険な場所だ。それでも行くかい?」

デミ子の言葉にパイモンは力強く頷いた。

少し時は経ち場所は暗い山裾、パイモンとデミ子はしばらく歩き続け、失われた時間の廃墟へと辿り着いた。しかしデミ子はそのまま足を進めず、その場で回ったりアイテムを取り出したりと不思議な行動を2分ほど続けていた。

「なあデミ子?お前何やってんだ?」

「ん?(クルクル)ああ、これをやることで(ガサゴソ)道中に出る魔物の(ブンブン)難易度を下げているのさ(クルクル)」

「…なんの話だ?」

「ああ、すまない。(ぴよんぴよん)これはキミの認識の外の話だね。(モグモグ)なに、気にしないでくれ(ブンブン)もうすぐ終わる(かちやかちや)」

やがて不思議な行動が終わると彼女はようやく前へと進み出す。

やがてテイワットでは見たこともない建築物の前に辿り着いた時、魔物が大量に現れた。

「うわ、なんかいつぱい出てきたぞー！」

「ゴボルドにゴブリンか、これくらいならワタシが戦うまでもないな」
そういうや否やデミ子は腕を振り上げ、

「アルフ○ツド！転送!!」

振り下ろした瞬間目の前に大きな樽のようなものが落ちてきた。そして中から遺跡守衛に似たゴーレムが現れた。アルフ○ツドは腕を振りまわし、叩きつけ、魔物たちを吹き飛ばしていった。

「いや、快適だね。ほら、この魔石に触れるとあの装置が作動するのさ。やってごらん?」

デミ子に促され、恐る恐る目の前の石に触れると中央にある装置が起動し、ゲートを開いた。

「おお！なんか開いたぞー！」

「あれが過去のエリアに転移するゲートだね。さあ、潜ってみよう」

2人がゲートを潜るとそこは色が失われた過去のエリア、ではなく何も無い空間だった。

「おや?これはワタシも知らないね?これは...」

デミ子はキョロキョロとあたりを見渡しているがパイモンはこの場所に見覚えがあった。

「ここ、オイラがいた扉の空間だ！」

「お?どうやら戻れたようだね、良かった良かった。それじゃあ、ここでお別れかな?」

「なんだか名残惜しいぞ。色々ありがとうな、デミ子！」

「お礼はいいさ、ほらあの開いた扉からキミを呼ぶ声がするよ?早く行ってあげなよ」

デミ子に急かされ、パイモンは示された扉をくぐる。

「また会おう、パイモン」

そして、

「.....!...モン?...:.....て、パイ...!起きろ!パイモン!も

うすぐ昼だよ！」

「うわあ！うるさい！って旅人!？」

叩き起こされたパイモンは旅人に驚き周囲を見渡し、

「夢、だったのか」

「どうしたの、パイモン？」

「…いや、なんでもないぞ。それよりお腹が空いたぞ！鹿狩りへ行ってお腹いっぱい食べたいぞ！」

「起きてすぐお腹いっぱい食べたらまた眠くなるよ？」

元気にモンドの街へ繰り出していった。

暗い扉が無数にある場所でデミ子は1人呟く、

「おかえりはこちら、か。随分と不思議な体験だったよ、パイモン。ワタシの声が聞いたことあると言ったのも、きつと偶然じゃないさ」

やがてデミ子の体から光が飛び出し、頭ひとつ分ほど大きな少女の形を作り出す。その分離した少女はデミ子の方を向くと静かに微笑んだ。

「XD—26…いや、カ○リナ、キミもありがとう。後ろの扉をくぐればアル○エリンガに帰れる。今は色々複雑な心境だろうけど、キミにとって良い結末になるよう祈ってるよ。ひとつだけヒントをあげよう、”泣き虫なあの子”の端末を探すといい」

そう言っでデミ子の頭を撫で、扉の先へと送り出した。やがて少女は振り返り、自分くぐるべき扉を見つけ、向かっていく。

「遠い未来の別世界で、ワタシとキミは再び会うことだろう。その時はよろしくね、パイモン？」

扉をくぐるその姿は紛れもなく、旅人であった。

旅ズレ短編集

ここはテイワット大陸。旅人は天理の調停者によって分たれた兄を探して今日もこの世界を歩き続ける。

【ラグとワープは混ざると危険】

それはある日のこと、旅人は少し焦っていた。

「あ、やべ。間違えて落下攻撃しちゃった。この高さだとゲージ半分かなあ？つて体力もないじゃん！やばいやばい!!」

…なんて事はない、風の翼を広げようと背中に手を伸ばし、剣を手にしてしまった。ぼーっとして思わぬ判断ミスをやってしまったのだ。

幾度となく繰り返したソレは空中で剣を手にとれば反射的に出てしまう。遙か上空でやらかしてしまえばダメージを受ける事は明白である。

「ここで落下死は流石に笑えないぞ！もう何ヶ月プレイしてるよ!」
メタいことを言いつつも頭をフル回転させる旅人、伊達に異世界を旅してはいない。

「あ、いや、焦ることもないか、マップ開いてワープワープっと」

操作ミス

スマホ版だとありがち。作者はよく風の翼と落下攻撃を間違えるよ
♪
移動しようとしてズームしたりとかもあるよね？

—————旅ズレtips—————

「よっし！星落としの湖にワープ完了！って… えっ!」バシャバ
シャ

そこは確かに星落としの湖の七天神像で間違いはなかった。なかったのだが、

「読み込みのラグで地面を抜けるなああああああ!!!」
旅人は今日もズレていく。

【探索人権真君】

西風騎士団の会議室にて、

「今日は探索人権真君のみんなに集まってもらったよ」

「探索人権真君？何だそれ？」

壇上に立つ旅人の発言に首を傾げるパイモン、2人の前には見知った顔が何人かいた。

「じゃあ紹介していくね？まずは風のバリアを飛んで抜けたリモンドの地図にない孤島への片道グライダーしたりと飛ぶことに特化した飛翔自在真君のウエンティ！」

「僕に変な二つ名つけようとするのやめてもらっていい？」

ウエンティの抗議の声を旅人はスルー、次の人物の紹介に移った。

「池や海を凍らせるなら俺に任せろ！スキルのクールタイムが短い踏氷渡海真君のガイア！」

「… お前さん、どうやら反省室にぶち込まれたいらしいな？」

ガイアの静かな脅しに旅人は目を逸らす。

「… お次はダツシユが現状誰よりも早い上に水上も走れる水上滑走真君のモナー！」

「あの移動は逃げたり攪乱したりする技であって魚を獲るための移動方法じゃないんですけど？いい加減お金取りますよ？」

「アルベーターの名前は伊達じゃない！疑似陽華タパルト、発射あ！旅人射出真君のアルベド！」

「旅人、望み通り空の果てまで射出してあげようか？」

旅人によって集められたメンバーは彼女の紹介に不満の声を上げる。旅人は壇上で笑っていたが段々周りの圧に耐えられなくなったのかドウドウと宥め始める。やがて扉が開き女性が入ってくる。

「すみません、凝光様よりこれを旅人に届けるよう言われました」

「や、やあ甘雨！わざわざ璃月からご苦労様。ワタシに手紙？何かな

？」

旅人はこれ幸いと甘雨に近づくと、手紙を受け取り中身を読む。

「えーっと何々？ふむ、甘雨のプレイアブル化とその性能一覧かな？ほえー、これはこれは…」

暫く唸っていた旅人だが、やがて手紙を読み終わると目を閉じる。一呼吸置いて目を見開き一言、

「えー、甘雨のプレイアブル化によってガイアのスキルのクールタイムを待つより彼女のチャージアローの方が効率的となったため、踏氷渡海真君のガイアさんはただ今をもって鉱石発掘派遣組へと転属になりました。新しい踏氷渡海真君は甘雨さんです、おめでとうございます」

「えっ!? な、なんですかそれ？えっと、ありがとうございます?」

笑顔で拍手する旅人と突然のことに困惑する甘雨、旅人は拍手をしつつ静かに動き扉から逃げようとしたが誰かにぶつかってしまった。振り向くとそこには、

「旅人、反省室に行こうか」(ニツコリ)

「… ツスウー…」(深呼吸)

笑顔のガイアがいた。

旅人はその日初めて反省室にぶち込まれた。ついでに反省文もいっぱい書いた。

【並行世界の旅人】

ある日モンドの街中で旅人とはぐれたパイモン。あちこちを飛び回っているとふと見慣れた金髪を見かけた。

「おい！旅人お！オイラを置いて勝手にいなくなるんじゃないっていつも言ってるだ…るだ…る?」

その背中にタツクルを仕掛け文句を言ったパイモンだったが振り向いた顔を見て言葉を失っていく。何故なら、

「あれ？パイモン?…っつと、キミはこっちの世界のパイモンかい？キミの相方なら今鹿狩りで料理を作ってるはずだよ?」

「おー、”こつち”のオイラはあの旅人にずいぶんと振り回されてるみたいだなあ」

何故なら旅人が探しているはずの兄と自分自身パイモンだったのだから。

マルチプレイ

他のプレイヤーやフレンドと遊べるよ！2〜4人で世界を探索しよう！

フレンドは付属していません、ガチャでも出ません

—————旅ズレtips—————

「はい！と、言うわけで今回は並行世界の旅人さんに来てもらってまーす。拍手！ぱちぱちぱちぱち！」

「いや、ぱちぱちじゃないぞ旅人！何で生き別れのお兄さんが居るんだ!?!しかももう1人のオイラまで!?!」

何事もなかったかのように仕切り直す旅人とツツコミを入れるパイモン、対面に座るのはもう1人の旅人であり生き別れの兄だったはずだ。するともう1人のパイモンが口を開く。

「”そつち”は兄の方が別れてしまったのか、オイラたちの方だと”妹”が別れてるんだぞ」

「オイラたちとは逆なのか、でもさつきからあつちとかこつちとかややこしいぞー！」

正直書いてる方もややこしいわこれ、どうしよう？

「…ふむ、確かにややこしいね。じゃお互いに名前で呼ぶのはどうかな、ホタル？」

「そうだね、ソラ。じゃあパイモンたちは私たちの名前と混ぜ合わせて…ソラモンとホタモンって便宜上呼ぶとしようか」

うん、それなら書きやすプレイヤー「観測者、うるさい」「ごめん。

並行世界の旅人2人はお互いが今どのあたりまで物語を進めているのか、ソラとホタルで何か違いはあるのか等話し合っていた。

そして数時間後。そこには、

「しかしそつちだとアビスについてるのは私になるのか、つまり悪墮

パイモンと夢の中 そののいち

パイモンが目覚めると、そこはまたしても扉の世界だった。

「おいおい、またこの扉の夢か？次はどこに行けばいいんだ？」

周囲を見渡せば前回も見た色も形も材質もさまざまな扉が無数に点在している。その中に一つだけ板が打ち付けられ封じられている扉がある。パイモンはその扉に見覚えがあった。デミ子と名乗る冒険者と出会った世界の扉だ。

「二度入った世界には行けなくなるのか？それはそれで寂しいな」

だからといってまた同じ場所に出たりしても大変だ。2度目も同じ方法で帰れるとも限らない。しばらく周囲を飛び回っていると、扉・・・と言うよりは石のアーチのようなものを見つけた。アーチの向こう側はこの暗い世界ではなくどこか明るい不思議な場所と繋がっているようだ。パイモンはそのアーチをくぐると途端に意識が遠のいていく。意識を失う直前見えたのは綺麗な海と複数ある石のアーチだった。

ホーム

アーチが沢山ある小さな島

星の子たちはここを拠点にしている

——旅ズレtips——

目が覚めると、そこは小さな島だった。

「んん、ここは・・・どこなんだ？」

周りは海に囲まれ、どこまでも続く青い空、小さな池と穴の空いた岩肌、石のアーチ、そして、

「ぷー、ぷー」

「ぽー！ぷえー！」

「ぶわわわわ」

「うわあ！なんだ!?なんだオマエら！」

「「ぼっぺー！」」

パイモンを取り囲む人？否、人に似た何かである。白い髪に丸いお面、背丈はバラバラだが茶色いマントを纏っている。髪型こそ違えと似たような見た目、茶色いマント、好奇心旺盛な動きはどことなく雀を連想させる。雀たちはパイモンの周りを取り囲むとぶわぶわと鳴き声のような音を出し、ぐるぐると忙しなく動く。

しばらく楽しそうに動き回っていた雀たちは飽きたのか不意に動きを止めると、パイモンと手を繋ぎ石のアーチへと向かい出した。アーチからは白い光が漏れていてうつすらとこことは違う景色が見える。アーチを潜った途端白い光に包まれ、気がつくところには緑豊かな場所だった。中央には小さな池と小島があり、その周囲には石のベンチ、赤いロウソク、岩をくりぬいたような見た目の何か（穴の一つ一つに髪型や服、お面などの模様が描かれてるので着替える場所、クローゼットのようなものかもしれない）があつた。先を見ると一面雲が広がっており、そこから先だけ飛び出た鐘がぼつかりと空いた雲のトンネルへと続いている。

「うわあ、すごく綺麗な場所だな！雲が下に見えるって事はすごく高いところなのか?… っておい！オマエら！オイラをどこに連れて… ま、まさか飛び込むのか？オイラが飛んでるからって3人も運べるわけじゃないんだぞ！」

周りの景色に見惚れていたパイモンの手を掴むと3匹の雀は雲のトンネルへ向かい走り出し、勢いよく崖から飛び降りた。

「うわああああああ!!おちっ、落ちるうううううう… ってあれ？オマエらも飛べるのかよ！」

そのまま真つ逆さまに落ちていくとばかり思っていたパイモンだったが、雀たちはマントを広げて空を滑空し自在に飛び回る。あのマントは風の翼のようなものなのかと納得したパイモンは、雀たちに連れられるまま雲のトンネルを抜け草原へと降り立った。雀たちは、花畑を走り回ったり、空を飛び回る光の玉を追いかけ回したりした

後、花畑の奥に見える神殿へと向かう。途中3つの島の鐘を鳴らし、現れた巨大なマンタの背に乗るというちよつとした冒険に雀たちもパイモンも大興奮であった。神殿の内部に入ると小さな祭壇があり石像が祀られていた。雀たちが祭壇に祈りを捧げると石像の目が光り、周囲の壺から光の蝶が大量に飛び出してきた。

「うわわ！なんだこいつら！… オイラたちを運んでくれてるのか？」

蝶に運ばれるまま祭壇の遥か上へと向かいやがてついた場所は木々に覆われた広場だった。あたりは背の高い木々が生い茂っており周囲は変わらず雲に覆われている。雀たちのジエスチャーを見る限り再び雲の中へと進み、奥深くへと行くらしい。2度目ともなれば慣れたものだ。雀たちと一緒にぽっかりと空いた雲のトンネルへと降りて行き、木々の合間を抜け門の前へと着地する。門の横にある光る石に雀がどこからともなく取り出した火のついたロウソクを近づけると、鉄の格子戸が開く。門をくぐり奥へと進むにつれ、ポツリポツリと雨が降り出し途中にあった洞窟を抜けるとそこはザーザーと雨が降る雨林へと姿を変えていた。雨に濡れながら進むパイモンたちだった。ふと雀たちを見て異変に気づく。

「オマエら、雨が苦手なのか？ マントからも光が抜けているみたいに見えるぞ？」

雀たちは濡れるのを嫌がりなんとかして雨宿りできる場所を探している。小さな東屋を見つけ駆け込むが1匹の雀が遅れたからか急に姿を失い真っ黒な人型に変貌してしまった。少し早く着いていた2匹の雀がロウソクを黒子に近づけるとすぐに雀の姿を取り戻しやがてマントにも光が貯まっていく。どうやらマントは光を貯め込むことができ、貯め込んだ光の数だけ飛べるようだ。そして雨に弱いのだろうか、濡れると光を徐々に失っていく。そんな雀たちのマントは3つの光が灯っている。東屋で暫く休んでいるとどこからか羽ばたく音が聞こえ、パイモンたちの前に一人の人型が現れた。その人型は雀たちとは違い青いマントを身につけ、イタチの面を被り、三つ編みおさげの傘をさした少女のような姿をしている。

「ふわわ…ふわわー？」

「ぱー！ふわわー！」

「ぽぽぽぽー！ふわわー！」

「ぽぽー！ぽぽぽぽわー！」

「ふわわ、へへへへ。ふわわー♪」

「「ふわわー！」」

何を言っているのかパイモンには全くわからないが4匹は会話？をする。パイモンと向き合う。雀たちのジェスチャーを見る限りここから先へはこのイタチ面の少女が連れて行ってくれるようだ。

「この青マントの子についていけばいいのか？わかったぞ！でもオマエたちはどうするんだ？」

そんな疑問を雀たちに問いかけると一人がその場で祈りを捧げるように座り出す。するとその雀は光に包まれその場から消えてしまった。イタチ面が傘の先端で地面に雀たちの絵と小さな島の絵を描き矢印で繋ぐ。どうやらあの島へと帰る手段があるらしい。残った雀たちも手を振ると同じように祈りを捧げ、光と共に消えてしまった。雀たちに手を振っていたイタチ面の少女は雀たちが帰ったのを確認するとパイモンへと向き直り手を差し出す。どうやらこの奥へは彼女が連れて行ってくれるようだ。

「連れて行ってくれるのか？じゃあよろしくな！」

差し出された手を掴むと彼女は傘を広げ雨林の奥へとマントを広げ飛び出した。彼女のマントは7つの光を貯め込んでおり雀たちよりも飛び慣れているのだろう。木々の合間をスイスイと抜け湖へと向かい、不思議なギミックを解き明かしあつという間に雨林の神殿へと到着してしまった。中央にある祭壇で彼女が祈りを捧げると奥にある大きな石扉が開き先へと進めるようになる。石扉の先は雲にこそ覆われているが外であり、雨もすつかり止んでいた。

「あの鳥たちについて飛んでいけばいいのか？わかったぞ！ありがとうなー！」

「ふわわー！ふわわー♪」

「ところで、オマエはついてこないのか？」

パイモンが彼女についてこないのかと問いかけると彼女は傘の先端で地面に絵を描き始めた。雀たちの絵、雨林の絵、傘をさし雀たちを連れて飛ぶ自分の絵、どうやら雨林の案内人をやっているらしい。彼女はパイモンが納得したのを確認すると、背を向け再び神殿の中へと戻っていった。

パイモンは彼女に教えられた通り鳥たちを追って雲の中を突き進んでいく。やがて雲が晴れるとそこは一面の銀世界だった。標高の高い山なのだろう岩肌は白く染め上げられ地面は一部凍りついている。

「うへえ、寒いなあ。どこか暖まれる場所はないかな…… お！見つけた！」

暫く飛んでいると雪の中焚き火で暖をとっている人型を見つけた。パイモンは自分も暖をとらせてもらえないかと近づいていく。

「おーい！オイラも焚き火にあたらせてくれよお！」

パイモンがそう言うのと人型はこちらを見て暫く固まった後頷いた。パイモンを……お面とマントをつけた人型以外を見るのが初めてなのだろうか、やがて再起動すると手で丸太を示して座るよう促す。その人型は頭に羽飾りを2つ付け、鳥の面を被り、黒いマントを纏っている。そのマントに溜め込まれた光は10個、かなりの熟練者なのだろう。そう思っていると不意に鳥面が喋り始めた。

「おや？パイモンじゃないか、ワタシの夢にキミが紛れ込むなんて珍しいこともあるもんだ」

「じゃ、喋った!?しかもその声、オマエ旅人か？」

そう、喋り出したのだ。

「そうだよ？ワタシの夢にようこそ♪ここは星の子達の世界だよ、パイモン♪」

歓迎するよと、その鳥面はパイモンのよく知る声で笑った。

—————

パイモンと夢の中そのののの

ソイツが言うにはここは星の子の世界、雪に覆われた峡谷で焚き火に当たるソイツは旅人の声で語り掛ける。

「ようこそワタシの夢へ、歓迎するよ…… ってどうしたんだい？ 眉間に皺なんて作っちゃって…… パイモンがやると面白いだけだよ？」

「オマエ本当に旅人か？ 偽物じゃないのか？」

「じゃあ自己紹介でもしようか？ ワタシはテイワット大陸にやってきた旅人で溺れかけてたパイモンを釣り上げてモンドで風魔龍事件を解決した荣誉騎士の旅人！ 趣味は宝探しとバグ探し！ 相棒のパイモンは非常食♪」

「誰が非常食だ！」

疑ったのも束の間、返ってきた返答にコイツは間違いなくあの旅人で間違いないと理解した。宝箱を見つげるためにマップ上を歩きまわり、崖を疑似陽華タパルトでぶっ飛び、世界”で”遊ぶ旅人だと。「ところで、この世界の人…… 星の子だっけ？ あの子たちは喋れないのにオマエは喋れるんだな」

「あー、いやね？ あの子たちも喋ろうと思えば喋れるんだよ？ ただ特殊なアイテムが必要なのさ」

この焚き火とかね、とぼやく旅人。魔法のアイテムさえあれば他の星の子達も喋れるようになると言う。

「ま、それは今は置いておこう。問題はキミが”目覚めるにはどうすればいいか”だね？」

「そうだな、今回はどうすれば夢から覚めるのかわからないぞ」

「前回があるのならそれを参考にすればいいんじゃないかな？ 前はどこの世界にいたんだい？」

前回の夢を参考にすればいいと言う旅人にパイモンはどうしたものかと考える。前の世界は魔物と戦って道を切り開くことで門を開いたと言える。だがこの世界には戦うべき魔物も戦うための武器もない。

「前はデミ子の錬金術と過去に時間を戻す門のおかげでなんとかなったけどここだと戦うことも無いし時間に関する魔法もないぞ？」
「デミ子に時間の門かぁ、アルチェ○ンガなら確かにあるな。ふむ、となるとパイモンの行く場所はあそこしかないね」

「どこにいけばいいんだ!? オイラどこへだつて行ってみせるぞ!」

帰る方法についてアテがあると語った旅人にパイモンは食い気味に反応した。旅人はそんなパイモンを横目に少し思案するようなポーズをとりゆつくりと口を開く。

「星の子達の使命は各地の大精霊へと祈りを捧げ、はるか先に見える山に登りその最果てに光を灯すこと。ここから見える嵐の山、暴風域を抜け原罪へ至る道、光を全て捧げ天空へ…」

そこならあるいはと語った旅人はどこか硬い声色をしていた。まるでそこへ行くことを拒否するかのよう。

「どうしたんだ旅人? その天空つてところに行くのに何か問題でもあるのか?」

「あ、いや? その、えつとお」

どこか歯切れの悪い旅人にパイモンが心配そうに尋ねると暫く唸った後ポツリポツリと語り出した。

「星の子達の命の源は光だ。無数の光を集め、光りの迷い子達を導き、最果ての原罪へと送り届ける。光を捧げ天空へ行くということはね? 命を全て投げ出し一度死ぬということなんだ」

「おい、それって!」

「星の子はその後天空へと還した光や精霊達の力を受け継いで転生することが出来るから特に問題は無い。しかしパイモンは星の子でも無ければ精霊でもない。ワタシが実体を持って案内できるのは原罪までだがキミはワタシの魂まで見る事ができるかい?」

かなり厳しい場所だがついて来れるかい? そう心配する旅人にパイモンは力強く頷いた。

「怖いけど、オイラ言ったぞ? どこへだつて行ってみせるぞつて」

少し震えてはいるものの、決意に満ちた瞳を見て旅人は頷いた。

「わかった、じゃあ超特急で向かうとしようか」

旅人はそう言うのとパイモンへ手を差し出す。その手を取ると旅人は素早く立ち上がり、雪山を一気に滑り降りた。氷のトンネルを抜け、崖から飛び出すと翼を広げ一気に神殿のような建物へと飛び込んだ。そのまま小さな祭壇に火を灯し道を開くと再び駆け出し競技場の坂を滑り降りる。猛スピードで駆け抜ける先にはもうゴールの神殿が見えた。神殿に飛び込んだ旅人は祭壇に祈りを捧げるのかと思いきや、着地することなく神殿の上へと飛び、天井近くに空いていた窓から外へと抜け出した。

「お、おい！祭壇は下だぞ！どこへ行くんだ？」

「ここはワタシの夢の中、あの時代の峡谷ならここから少し時間短縮ができる！」

神殿の外は先程の競技場、ではなく広大な海だった。旅人の進む先に風が渦巻いているのが見える。

「ようこそ峡谷神殿の裏世界へ、現実の星の子達の世界にはもう無い近道へとご招待しよう！」

「おい！なんかあの渦やばい雰囲気してるぞ！本気で飛び込むのか！？オイラ心の準備がっておい！やめ！」

明らかにやばい雰囲気渦に2人は飲み込まれていった。ぐるぐると暫く回りながら落ちていくと、やがて薄暗い雰囲気の廃墟へと抜けた。地面に落ちる途中、不意に旅人が風の翼（魔法のケープというらしい）を広げると風に流されるように上昇し、一度も降りることなく奥に見えた遺跡の中へと向かっていった。

「ところでパイモン、この世界には敵になり得る生き物がいないって言ってたけどさ？いるんだよ、ほら」

「な、なんだあの黒くてでっかいの？」

遺跡の中でようやくよく着地した旅人は足音を殺して静かに歩き出す。そんな旅人が指さす方向には大きな黒い生き物が目を光らせ飛んでいた。

「あれは暗黒竜、星の子や光の生物達を襲う怪物さ。まあその見た目から一部界限ではエビって呼ばれてるけど」

「強そうな名前のインパクトが一瞬で消し飛んだぞ？」

「まあまあ、あいつらの動きは把握してるから任せてよ」

そう言うのと旅人は翼を広げ飛び上がり、暗黒竜から見えない位置を素早く抜ける。外へと出ると暗黒竜が4匹もいたが、旅人は特に気にした様子もなく空へと羽ばたく。

「お、おい！たくさんいるのに大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫♪あいつらの下しか見てないんだから」

遙か上を抜ければ大丈夫だと戯けて暗黒竜の頭上を真っ直ぐ飛んでいく。それにしてもかなり長い間飛んでいるのだが旅人は翼の光が尽きることがない、不思議に思い旅人を見ると何やらフラスコを取り出すと口に突っ込んで中身を飲んでいった。

「なあ旅人、それなんだ？」

「(ゴクゴク)んん？これ？リカバリードリンク。翼を回復できる。数に限りがあるから普通はここまでがぶ飲みしない」

空になったフラスコを投げ捨てる旅人、ソレは地面に落ちる前に光になって散っていった。その後も途中で翼を回復し、神殿へと向かう。しかし神殿には格子戸が降りており、中に入ることができなくなっていた。

「あれ？閉まってるぞ！どうやって入るんだ？」

「後ろに金色の円盤みたいなものがあるだろ？あれに口ウソクの光を灯せば門が開くんだよ。そのかわりエビが3匹ここに解き放たれて迫ってくるがな？」

「ヒエッ！じ、じゃあ！どどど、どうするんだよ！」

「まあこれくらいの間隙ならパイモン入れるだろ？先に抜けててよ」

そう言うのと旅人は格子戸にパイモンを押し込んだ。案外幅広い隙間だったのでパイモンは抜かれたが旅人はどうするのだろうかとうと振り返る。なにせ旅人はこの世界では最大身長らしくかなり背が高い。とてもじゃないが格子戸を抜けれそうに無いのだ。しかし旅人はギミックに近づくことなくほんの少し格子戸から離れると少しジャンプして突っ込んできた。するとどういった原理なのか、旅人は格子戸にぶつかるとも隙間にはまることもなくすり抜けてきたでは無いのか！

「……何したんだ？」

「判定を抜けた」

こいつはどこの世界にいてもバグなのか！とパイモンは只々呆れるしかなかった。よくよく考えれば峡谷の神殿も判定を利用して抜けているのだ、今更である。

神殿の中に入ると周りには目もくれず祭壇で祈りを捧げる旅人。正面の門が開き先へと進む。

扉の向こうは壁一面に柵が敷き詰められており四角い石が所狭しと並べられていた。

「ようこそ書庫へ、ここを登れば暴風域だ。ゴールは近いぞ？」

「いよいよだな！っておい、だれか近づいてくるぞ？」

もうすぐゴールだと張り切っていると2人の前に2匹の星の子が現れた。赤い帽子を被り、イタチ面を付け、白地に金の飾りのついたケープを纏った長身の星の子と水色のケープを纏った小さな星の子である。どちらもケープに溜め込んだ光は10個、旅人と同じベテランである。2匹は旅人に近づくと同時に話し始めた。

「プワァ！プペー！」

「パイモン、ちよつと待っててね？…コホン、ンワアアア！」

「プペー！ペペペー！ンイイイイ！」

「プワッ！プワッ！ピー！」

「旅人も会話はソレなのか……」

鳴き声で会話？をする3匹、暫く鳴いていたが、やがて旅人が戻ってきた。

「パイモンを天空へと送り届けないといけないうって言ったらこの2人が原罪手前まで案内してくれるってさ。コイツらワタシより飛ぶのもバグも上手いから爆速でいけるぞ？」

「お、おう（類は友を呼ぶ……か）」

話の展開についていけずただ頷くしかできなかつたパイモンを掴むと旅人は小さな星の子と手を繋いだ。少し進み上にまっすぐ伸びた場所に着くと背の高い星の子が小さい星の子に何か合図を出す。それに合わせて2人が少しジャンプしたかと思った次の瞬間、4人は

一瞬で遙か上に見えた天井スレスレまで飛び上がった。

「プワァ!プペー!」

「お、あつという間に最上階だな。やはり肩車ロケットは速いな」
「い、今何が起こったんだ…?」

「ワタシも厳密には分からん。互いに”肩車の上に乗る”と言う行為を同時に行うことであつて飛ぶらしい」

「???」

「???」
パイモンは考えるのをやめた。旅人達は最上階の祭壇へと向かうと、祈りを捧げ、最後の門を開く。

「プワワン!プペー!」

「2人が言うようにここから先が暴風域だ、ワタシもこの最短ルートは慣れていないがこの2人になら安心して任せられるよ」

「旅人は星の子の言葉も分かるのか?」

パイモンの疑問に旅人は自分も星の子だからねと返す。門を抜けた先は突風が吹いており翼を広げ飛ばうものならあつという間に吹き飛ばされてしまいそうだ。事実終始宙に浮いているパイモンは吹き飛ばされそうになっており旅人の背に必死にしがみついている。そんな暴風域の中でも案内人の星の子2人は構わず進み出し、崖から翼を広げ飛び出した。そして突風に逆らいながら上へ上へと飛ばたくと、やがて眼下に見える歩きのルートの先にある小さな祠へと真っ直ぐに飛び込んでいった。旅人曰くここがショートカットの第一関門らしい。難易度は普通だとか。

祠を抜けると、頂上から下に下へと吹き付ける突風とその風に流されて飛んでくる岩の雨が降る山道へとたどり着く。

「あの飛んでくる岩に当たったら羽が散る、地面から生えてる赤い石も触れただけでケープが光を失うからここから先は割と地獄」

そう愚痴をこぼす旅人だが案内人達は何度もここへ来ているのか、躊躇することなく駆け出し、そして翼を広げ飛び上がる。そして飛んでくる岩の上を飛び、ひたすら飛ばたい奥に見える光るトンネルを目指す。

「ここは10枚羽ならいけなくは無いらしいがどうやったらできるの

かワタシにはとんと見当がつかぬ。いつもおっかなびつくり岩を避け、エビから隠れながらあのパイプ周りを抜け、光を失い黒子になりながらあのトンネルに向かって歩くんだ」

このショートカットはワタシには理解できぬと愚痴る旅人はどこか遠い目をしていた。(鳥面つけてるから表情は読めないがそんな雰囲気をしている)

トンネルの中へ飛び込むと案内人達はようやく旅人から手を離れた。

「プワッ! プワッ!」

「パイモン、この奥が原罪、ゴールだよ? 案内してくれた2人ともありがとうね」

「ありがとうな!」

「ンワアアアア! シイイイイ!」

「じゃあ、また後でね?」

案内人達は手を振るとその場で祈りを捧げホームへと帰って行った。2人が消えるのを暫く見ていた旅人だが、やがてトンネルの奥を睨み進み出す。

「いくよパイモン、覚悟はできた?」

「いつでもいいぞ! 相棒!」

2人は旅の終点、原罪へと歩き出した。

パイモンと夢の中 そのののさん

原罪

―失われし者たちに光を―

長いトンネルを抜けると、そこは地獄であった。とまあ冗談はさておき、ここは原罪、赤い岩が雨のように降り注ぎあたりに人型の石像が沢山ある池であった。

「原罪、失われし者たちに光を…か」

「旅人！赤い石がめっちゃ降ってくるぞ！オイラはどうしたらいい？」

星の子に害のある赤い石が大量に降ってくるそこはまさに星の子にとつての地獄。パイモンは旅人に指示を仰ぐ。

「パイモンは何もしなくていい。赤い石はパイモンには害はないはずだから、ただワタシについてきてほしい」

確かに、赤い石は先ほどからパイモンにも当たっているのだが、光を失う感覚も、ぶつかった痛みも感じない。どうやら星の子にだけ害があるらしい。

「わ、わかったぞ。旅人はどうするんだ？」

「ワタシは今からここにいる石化した星の子63人全員に自分の翼を全て与える」

そう言うや否や旅人は池に飛び込み石像…いや、石化した星の子へと近づいていく。旅人が自らの胸を押さえると光のカケラが現れ、石化した星の子へと吸い込まれていく。

「ワタシの光のカケラは138個！赤い雨に打たれ光が尽きるのが先か！星の子達に配り終えるのが先か！いくぞ原罪！」

岩陰の燭台に火を付けながら星の子達に光を分け与える旅人。赤い雨に打たれ黒子になりつつも進む旅人だったかやがて岩陰のない場所へとたどり着く。その先にも無数の星の子達が見えるため、ここ

からは雨に打たれながら、光を散らしながらの耐久レースになるのだろうか。

「ここまでで33人に光を与えた。残りの翼は97個。ここから先には30人だから・・・よし！全員救えるな！」

すでに黒子状態となり満身創痍にしが見えない旅人だが一度気合を入れ直すと、岩陰から飛び出し赤い雨の降り続ける場所へと飛び出した。赤い雨は容赦なく旅人を吹き飛ばし、光を散らす。星の子としての命を削りながらすでに石化した星の子達に光を与え続ける様は正直痛々し過ぎて見てられない。それでもそうしなければ天空へと至る道は開かれないのだから、パイモンは只々旅人を見守り続けた。そして、

「この子で最後！・・・よし！よし！28個残しで何とか全員を救えたな！」バリンバリン！

満足げに頷く旅人だが現在進行形で赤い雨に打たれ光を散らし続けている。今も3つほど吹き飛んでいった。

さて、63人全員に光を与えたのだから道が開くのかと思えばそんなことはない。パイモンは不思議に思い未だ光を散らし続ける旅人に問いかける。

「な、なあ？石化した星の子達全員に光を与えたのに天空への道が開かないぞ？どういうことだ？」

そんな焦った声に旅人はクスリと笑うと優しい声音で返事をする。

「おや？パイモン、判定抜けや肩車ロケットみたいなバグによる爆速ツアーでここまでできたから峡谷でワタシが言ったこと忘れちゃった？」

「え？原罪から天空へと送り届けるって話だったよな？」

「そうだけど、天空へ行くにはどうしないといけないのか言ったよね？」

天空へ行くにはどうするのか、パイモンは峡谷で旅人が言っていた言葉を必死に思い出した。

「星の子達の命の源は光だ。無数の光を集め、光りの迷い子達を導き、最果ての原罪へと送り届ける。光を捧げ天空へ行くということとはね？命を全て投げ出し一度死ぬということなんだ」

「おい、それって！」

「おい、まさか！」

「あつはつはつは♪キミが思い出している間にもワタシの光は散り続け気づけば残り3個。0になれば準備が整う。さあ、ワタシ達の魂を天空へと運んでおくれ！」

光達について行くんだ。旅人はそこまで言うとき黒子の姿が散り、白い魂となつて周囲を彷徨い始める。それは星の子の死。そう、死んだのだ。夢の中の出来事とは言え、星の子が、旅人が死んでしまった。宝箱に目がなく、バグを探してあちこちで大暴れする困った奴だが、それでも溺れかけていたパイモンを救い、モンドで風魔龍事件を解決し、璃月で人と仙人を繋ぎ、ファデュイ愚人衆と戦い、渦の魔人から璃月を守り抜いた凄い相棒だ。そんな旅人が、たった今、パイモンの目の前で、呆気なく、本当に呆気なく死んでしまったのだ。パイモンは暫く呆然とその青い魂を見つめていたが、やがて大粒の涙を両目から流し始めた。

「おい……おい！最後までオイラを連れて行ってくれるんじゃないのかよ！何で！何で！うわああああああああああん！あああああああああああ！」

大声で泣き喚いても旅人の魂は応えず、ただふよふよとパイモンの周りを回る。パイモンを元氣付けるように、何も心配することはないと言ひ聞かせるように飛び回るのが悲しくてパイモンは泣き続ける。

どれだけ泣いただろうか……

いよ、実際はほんの数分なのだ

が今のパイモンには永遠にも等しかった。そんなパイモンの耳にパリンパリンと、何かが割れるような音が聞こえてきた。涙を拭いあたりを見回すと、石化した星の子達が次々に光輝き空へと飛び上がって行く。驚いて目を丸くしていると目の前の旅人の魂も周りと同じように眩しく光りだし、他の光る星の子達と同じ様な姿になると手を差し伸べてきた。

さあ、行こう！光の子は一切声を出さなかったがパイモンには確かにそう聞こえた。

「わかった、行こう！」

その手を取ると光の子は勢いよく空へと飛び出す。降り注ぐ岩をすり抜け、吹き付ける暴風を物ともせず、ただただ上へと飛び続ける。やがて雲を抜けると、星空が見えてきた。それでも尚光の子は飛び続け、空に浮かぶ建物を追い抜き、青い夜空を飛び越し、やがて何処を見ても漆黒の空と光り輝く星々が散りばめられた空の果て、天空へと辿り着いた。

天空

―再誕する者に祝福を、目覚める者に別れを―

パイモンを連れた光の子がそこに降り立つと、先に到着していた63人の光の子達は一斉に光の玉となり、旅人だった光の子の中に吸い込まれていく。全ての光が1人に集まった後、光の子は急速に光を失い、やがて星の子の姿ではなく見慣れたテイワット大陸での旅人の姿へと変わった。旅人はどこかばつの悪そうな顔をしながらおそおすとパイモンに近づく。そして旅人が何かを言う前にパイモンが勢いよく飛び付いた。

「うわああああああああん！ほんとに死んだかと思ったじゃないかあああああああ！」

「う、うん。その…ごめんね？」

「そんな一言で片付けるなああああああ！ばかあああああああ！うわああああああああん!!」

謝る旅人と泣き続けるパイモン。流石の旅人も今回は自分に非があると自覚しているのか、パイモンが落ち着くまで優しく抱きとめ背中をさすっていた。

「……落ち着いた？」

「うん、ありがとな旅人。ここが天空なのか？」

「そうだよ。ワタシの知ってる天空と少しばかり違うみたいだけど」

やがて落ち着いたパイモンに旅人は語り掛ける。本来の天空は天の川のような星の道がありその先にホームへと戻る石のアーチがあるのだが、本来アーチがある場所に見慣れない扉があった。その模様はどことなくテイワット大陸にある秘境の扉の模様に似ている気がした。

「あれはテイワット大陸に戻る扉で合ってるのかな？」

「前の夢で見た扉と同じだぞ！これで帰れるな！」

そう言つて扉に近づくパイモンだったが、ふと後ろを振り返る。旅人は一緒にいるが彼女は扉に近づこうとしないのだ。

「なあ、旅人は来ないのか？向こうで目が覚めるだけだぞ？」

「そうしたいのはやまやまなんだけどね、ワタシはそっちに行けないんだ」

ワタシはあくまでこの夢の世界の住人だからね、と旅人は寂しげに笑う。

「ワタシは確かにパイモンの知る旅人だけど旅人本人じゃない。夢の中のワタシは現実のワタシと記憶はリンクしてるけどあくまで別人。ここにいるワタシは星の子だから、テイワットじゃなくホームに帰らないといけない」

だからここでお別れだよ。そう言つて旅人はどこからともなく黒いケープを取り出し鳥のお面を付けた。旅人はパイモンに手を振ると彼女の背後に現れた石のアーチをくぐり、姿を消した。パイモンは暫く石のアーチを見ていたがやがて振り返りテイワット大陸に戻る扉を開いた。

「じゃ、またな！旅人！」
星の子

旅人とパイモンの出会いの話

空を見上げれば幾億もの星々が煌めき、月明かりと共に地上を照らす。

朝の眩しい光と異なりどこか優しい光に照らされ、大地に寝転がる少女は空を見上げる。

「あ、流れ星だ」

キラリと流れてはすぐに消えてしまう、どこかの世界では願い事を叶えてくれる星の逸話を知る少女は自分の想いを声に出さず心の中で願う。そして願い事を済ませた少女はふとここまでの旅路を思い返す。

「この世界に来て2ヶ月ちよつと、色んなことがあったなあ」

その目は懐かしむような、呆れたような顔をしていた。

「たった2ヶ月ちよつと、それなのに気がつけばモンドの英雄ねえ…

展開早すぎない？ねえ、荣誉騎士サマ？……なんてね」

自嘲気味にぼやくが、その目はどこか楽しそうだ。そう、事の始まりは2ヶ月と少し前……

「余所者、お前たちの旅はここまでだ」

「待つて！どうするつもり？よくもワタシのお兄ちゃんを！」

「……んん？ワタシ……は、確か封印……されて……た気……が」

目を覚ますとそこは見知らぬ世界。自身の状況を確認、息は、できる。言葉は、

「ことばは、話せるみたい。この世界の言語には対応してるかな？」

なら、力は、

「……おや、飛ぶことができないね。他の力も、ダメっぽい」

転移は、マーカーの解放をしていない？マップは、簡易的かつ周囲しか分からないか。周囲把握をしつつ原生生物の確認、近くにはいなさそう。

最後に持ち物、武器、『無鋒の剣』を確認。鉄剣か。その他、無し。

「その他のアイテム、無し……なし!？」

メイト系回復薬、無し、アトマイザー系範囲回復薬、無し、星のキャンドル、無し、メセタ、無し。無し無し無し無し無し無無無無無無無無!!!

「おいおい、嘘だろ?ワタシの20億メセタ……」

再度自身の状況を確認、定義、着の身着のまま無一文。剣一本で稼げと?

「アイテムスロットが豊富、武器の展開は…… うん?フォトンと同じ感じで出るのか」

武器を意識して手を広げればすぐに剣が現れ手に収まる。消して再度展開。数度繰り返し動きを馴染ませる。自身の状況の確認完了。次は辺りを散策しながら身体を馴染ませようか。暫く動き回り、走り、跳び、息が切れる。

「はあ、はあ、あり?こんな体力なかったっけ?」

スタミナゲージが切れるのが早いため、スタミナの上昇については後でいいか。

「それにしても、お腹減ったね。日が暮れる前に食料だけでもなんとかしないと」

鳥はすぐに逃げるしイノシシには吹っ飛ばされるし(アチーブメント《十歳にしてイノシシを倒すところだった》解放)でなかなか食料が手に入らない。イタチを追いかけてようやくお肉をゲット。火を起こして早速イタダキマス。

「…… うん、明日からは調味料も探そうか。最悪海水で味をつけよう」

素材本来の旨味…… ってね?うん、肉の味だったよ。

そんな生活が続けて暫く、魚を釣ろうと思えば海辺をお散歩。この辺りでいいかな。

「さあさあ、何が釣れるかな?」

糸を垂らして静かに待つ。竿に手応え!本日一発目は!なんと!

「ふむ、スズキか。焼いて食おう」

即座に串を刺してあらかじめ用意していた焚き火にポイ。焼ける

のを待とう。

「お、再び手応え！これはさつきよりでかいぞ！」

2度目の手応えに大物の予感！とはいえ獲物は抵抗らしい抵抗をせずグングンと近づいてきて、

「いぎー！フィィィィッシュ!!!」

勢いに身を任せ竿を引けば、

「おおー！デカイ！デカイ…なんだ？」

それは魚ではなく小さな人型のナニカであった。ふわふわもちもちと言った表現の合いそうな服装に身体。人間というにはあまりにも小さな見た目。まるで御伽噺の妖精のようだ。

「ふむ、妖精の類かな？…食えるだろうか？」（空腹）

「お、オイラは食べ物じゃないぞ！」

あら、生きてた。踊り食いとは流石に憚られる。

「なんなんだお前！その目をやめろ！ヨダレを垂らすな！オイラに近づくんじゃねえ！」

警戒心MAXの小さなソイツと空腹で仕方がないワタシ。

かくして、旅人とパイモンの出会いは割と残念な感じだった。

「…それで、キミはなんで海なんかに？」 オサカナモグモグ

「魚を獲ろうとして波に攫われちゃったんだ」 オサカナモグモグ

その後も釣りを続け、釣れた魚を2人で食べながら、ワタシはパイモンと会話をしていた。言葉が通じることはいいことだ、この見知らぬ世界で言葉まで通じないとなると宇宙蛮族式の意味疎通を行う必要が出てくる。かつて地球という星の実地調査で現地の協力者相手にやって警備を呼ばれたことがある。普通の人間はゼロ距離まで近づいてこないし目の前で飛び跳ねたり踊り出したりもしない。嗚呼素晴らしきかな言語による意思疎通！

「…？お前はなんで泣いてるんだ？」

「嗚呼、いやなに、言葉が通じることに感動しているのさ」

飛んだり跳ねたりした上で殺し合うこともないからね。誰も猛き闘争とか全知とか求めてないものね。

「… まあいいや、お前のことはなんで呼べばいい？」

「ワタシの名前かい？ワタシの名前は蛍（L u m i n e）だ」

「んん？今なんて言った？」

「蛍（L u m i n e）だよ？… ふむ、言語化が難しいな。仕方ない、ワタシのことは旅人とも呼んでくれ」

互いに軽い自己紹介をした後、ワタシ達は旅を再開した。アテもない旅をしていたワタシを見かねてか、それとも救った^{釣った}礼なのかパイモンは自ら案内人となりワタシをあちこちは連れて行ってくれた。小さな集落やスライムの水辺、険しい山道など様々な景色を見ることができた。しかし肝心の兄の情報は一切無し。探し回るのも疲れた。かれこれ2ヶ月もうろちよろしてたのだ。そして場所はある海辺の砂浜で、

「つまり、おまえたちは世界の外から漂流してきたのか？」

ワタシはパイモンに自分と兄について語ったのだった。

旅ズレ短編集 その二

《旅人とムービー》

旅人は文字通り世界を股にかける旅人である。数多の世界を旅し、その世界の文化に触れ、そして敵とも戦ってきた。ある世界では巨大なドラゴン^{レイドボス}を兄妹2人だけで討伐したり、星^{ダーク}をも呑み込む^{オア}巨悪^スとソロで戦い、なおかつ討伐時間を競い合う余裕すら見せるほどの強者である。

しかし、そんな2人でも苦戦したり、負けてしまったりすることもある。強力な敵ですら片手間に倒すような奴が何をと思うかもしれない。だが2人は現在確かに苦戦していた。

「くっ、コイツ強い！ホタル！左右から仕掛けるぞ！」

「わかった！ソラに合わせる！」

たった1人の敵に対し2人で仕掛ける。空を自在に飛び、剣に力を込めて全力の攻撃を放つ。しかし、

「… 人の子の驕りに終焉を」

当たれば強力な敵でさえ怯む攻撃、その悉くが防がれ敵の追尾攻撃に至ってはギリギリのところまで回避せざるを得ない。気を抜けば即座にやられるだろう。やがて、

「まずは1人…」

「ソラ！」

双子の片割れが敵の攻撃をくらい封印される。残された1人は怒りのままに敵に攻撃を仕掛けるが、

「これで終わりだ…」

防がれた上に自身も封印されてしまう。

「まって！どうするつもり？よくも私のお兄ちゃんを！」

そう叫びながらも彼女は自分達が負けた理由をぼんやりと理解していた。

「実力不足？否。敵の戦術？否。そう、自分たちが負けた理由は、

(ああ、畜生！ムービー^{負けイベント}戦闘かつ!!)

《世界の修正力》

ドラゴンズパインでの活躍、そしてモンドで不思議な冒険者”ダインスレイヴ”との邂逅。今度は璃月で何やらお祭り？のようなイベントがあるらしい。旅人は食材確保や宝箱発掘のために今日もワープを使わずに璃月港へと向かっていた。

「相変わらずこの崖高いよね？」

「でも今のオイラ達ならなんてことないぞ！」

旅人は目の前の崖を見上げながらボヤクがパイモンは心配ないと自信ありげだ。

「疑似陽華タパルト、前にも言ったけどバグである以上ずっと使える技ではないんだよ？」

旅人はそういうとアルベドキャラチェンと変わり近くの木の側に疑似陽華を展開、いつもの要領で射出バグを発生させようと剣を振った。しかし、

「…うん、やっぱりね」

「あれ？旅人どうしたんだ、失敗か？」

旅人が空高く射出されることはなく、疑似陽華の上には剣を振った状態のままどこか納得したような顔をした旅人と射出されなかったことに疑問を抱いたパイモンがいた。

「前にも言ったよね？長続きするもんじゃないって」

「でも、それは他に便利な技が使えるようになったらって話だったじゃないか」

「それは本来マトモな技にだからこそ言えることであってこのバグは例外だろうね」

まあ、バグをそのままテクニックとして残す世界もあるんだが…とボヤきつつパイモンの言葉を否定する旅人。

「今回のこれは世界の修正力が働いたんだろう。以前にもアンバー元・バグの女王の空中歩行初期のバグ技、狙い撃ち状態をキープすることで空中を歩くことができた。修正済み。やウエンティの無限上昇スキル長押しと

カメラ機能をうまく使った初期のバグ、無限降下も可能。verl.
1で修正済み。が使えなくなってるし」

「さて、それはオイラ知らないぞ!」

現在は修正されている過去のバグ技を旅人はしみじみと語った。

「まあ、なんだ。いかに便利な技であれ世界に支障をきたすバグはいずれ世界そのものに消^{修正}されるってことさ」

「なんか”まとめ”みたいになつたな」

「進行に支障をきたさないなら出来るうちに楽しんだもん勝ちよ」

「おいおい・・・」

《旅人の姿》

「そういえば旅人って他の世界だとなんで姿が変わるんだ?」

ある日、パイモンのふとした疑問に旅人はふむと顎に手を添える。

「ふむ、それはうまく説明できない質問だよ」

「何か話しくいことでもあるのか?」

「これだ! っていう言葉が見つからない。まあ頑張ってみるよ」

そう前置きした旅人はポツポツと語り出した。

「つ前の短編で少し前にバグと世界の修正力の話をしたね? え? いつの話って・・・

おや、覚えていない?... そうそう”楽しんだもん勝ち”ってまとめたヤツさ。さて、あの時はバグについて語ったけど世界の修正力は別にバグにのみ作用するものではないんだよ。それが別世界で私の姿が変わる原因でもあるんだけどね。

例えばアル○エリンガ、デミ子の私と出会った世界にはいろんな人々がいるんだけど特定のクラスの子は皆似たような容姿になるんだ。錬金術師は皆デミ子に、弓士はエルフにといった具合にね。

星の子の世界も同じさ。かつての文明が滅び残されたのは星から生まれ落ちた星の子達。最初は雀ちゃんで精霊達と交流したり世界をループすることでどんどん姿を変えていく。でも星の子であるこ

と自体は変わらない。他の精霊やエビなんかになることはない。

『その世界に影響のある特定の存在に固定される』って言えばいいのかな？ それが私の姿が別世界で変わったたりする理由。うまく説明できてるかはわからないけど。直接^M介入^Oできる^R世界^Pは^G大体こんな感じだよ。なかには観測^ソしかできない^{シヤ}世界もある^ゲんだけどそういうところだと他者を介してその世界を観測したり影響を与えたりできるんだ。え？例え？… そうだなあ… ある世界では海軍の提督さんをやつてたね、他にも魔塔を建築するオヤカタだったり、並行世界を^来する部隊の隊長（黒猫）だったりもしたかな？うどんの国で勇者を育成したこともあるし、別世界では歌って戦う戦姫の世界を観測したこともあるよ。

例え話はもうおしまい。昔語りしたら日が暮れちゃうからね。

「… とまあ^主が^人つ^公つ^介り^入した^世界^はこんな感じかな？うまく伝わってる^といい^んだけ^ど」

「ちなみに例外とかはあるのか？」

「純粹に旅をした世界かなあ、そういうところは服装だけその世界基準になったね。勇者様と出会った世界とか。ゴミ箱に食べられた人を見た世界とか」

機会があればまた話すよ。そう言つて旅人は話を終えた。

パイモンは世界についてまた一つ賢くなった気がした。

旅人と風魔龍事変 そのいち

「果たして、それから何年経ったのか？ワタシにはもう分からな
い。ー目覚めてからずっと一人で彷徨ってた。2ヶ月前、あなたと
出会うまで…」

「おう！あの時オマエがいなかったら、オイラはもうとっくに溺れ死
んでたからな…。だからオイラも、案内役頑張るぜ！」

案内は任せろと胸を張る小さな姿が微笑ましくて自然と笑みが浮
かぶ。

「そろそろ出発の時間だ、行こう！」

そう言っただけで飛んでいった姿を見つつ少女は立ち上がり後を追いか
けていった。

《旅人》

さて、負けイベの回想も終わったしワタシもあの子についていかな
いとね。それにしても随分と速いな。案内といいつつ置いていくの
はどうかと思うぞ？… おっと、この赤く光っているのに触ればイ
イのかい？どれどれ… ふむ、ワープポイントのマーカーなのか。
複数起動できればあっちこっちへとひとっ飛びだね♪… あれ？こ
れくらいの段差ならアー〇スたるものジャンプで軽く登れるはずな
んだが… 仕方ない、よじ登るか。

「目指すは… 『七天神像』！」

シチテンジンゾウ？なんかの像でもあるのかい？

「この世界にいる七柱の神のうち、誰を探してるんだ？」

そりやもうワタシたちを封印しやがったあの天理のなんたらって
やつさー！

… っっておお！なんだこの景色!! すごい！え？どれが七天神像
だつて？それよりこの景色をもうちよつと堪能させて欲しいかな？
ほえー… 奥に城？が見えて手前には湖、両側は崖になってて何とい
うかこう… 絵になるなあ。(語彙力…)

よつし、とりあえず進めばいいんだな？それじゃあ全速前進……あれ？ちよつとパイモンさん？ワタシ落ちてる気がするんですが？崖からこう、ね？…浮遊感というのがですね？いやあ、なんかゆつくりと地面が近づいてくるなあ（白目）。

”此処は、ゴールじゃない……”

コンティニュー？ ▶？Yes / No

序章 第一幕

風を捕まえる異邦人

解放済み

待って？今の無しで…今の無し！ノーカン！ノーカン！…やばい、超恥ずかしい。

あ、パイモンさん、お待ちせしました。続きどうぞ。（赤面）

「…ほら、言葉は歌となり風と共に流れるだろ？その中にきつとお兄さんの情報があると思うんだ」

あらあら、なかなか詩的なことを言うんだね？そう言うの好きだよ？

そんで持つてあの湖の真ん中にある像が七天神像とかいうやつなのね。これに触れればいいの？…お？おお！力が、流れ込んでくるような感覚！そして今頭の中に周辺マップが登録された感じがした！そうか、これが鷹○目か…。（違う）

「どうだ？この世界の『元素』を感じたか？」

なんかこう、身体が軽くなつたような感じがする。え？誰でも出来るもんじゃないのか。”俺、また何かやっちゃいました？”ってやつか！…とかボケてたらなんかスライムが湧きやがった。これは力を試すには丁度いいってか!?

”風神！”（あいや、風刃？まあいいや）

つと、複数湧かれると厄介だな！ええと、こうすればいいのかな？
”風と共に去れ！”

… うーん爽快♪

スライムもやっつけたし行くか、モンドにむけてしゅっぱーっ！… ってなんだアレ!?ドラゴン?ドラゴンなのか?マグマパンチしなきゃ!じゃなくてこの世界にもドラゴンっているのね?シユツとした見た目でなんかかっこいいね!ワタシの知ってるドラゴンなんて気持ち悪いぐらい細い青いシードラゴン・サフェードラヤツとか、ずんぐりむつくりしたグリーンドラゴン・カラオン緑の憎いアンチクシヨウとかなんだけど… あ、まあザードとかフェーとかはまあ、カツコよかったと思うよ?さて、現実逃避はこれくらいにしてあのドラゴンが降りたと思われる森に入りますか。食べられませんよーに!ナムナム。

「… 怖がらないで… 安心して、ボクは帰ってきたよ」

「アイツ… ドラゴンと話してる?」

あら、可愛い子。ボクっ娘かあ。いいね!ボクっ娘美少女!美少女とドラゴン!いやあ、絵になるなあ!(小並感)… あの、ドラゴンさんこっち見てね?(汗)

「グオアアアアアアアア!!」

「わっ!!… 誰?」

ヤツベ!バレたよ!いや、お邪魔しちゃってごめんなさい!… って、消えた!美少女が消えた!… ついでにドラゴンもどっか飛んでったわ。ところでパイモン?髪引きちぎられそうになったんだけど?結構痛かったよ?

ところで、あの石なに?なんかこう、禍々しい感じがする。まあ、ポケットに入れておくか。先に進もう。

ちよ!イノシシ!イノシシこのやろう!突っ込んでくるんじやねえ!オラア!剣を喰らええ!よし、ご飯ゲット。さあ!モンドに向けて再しゅっぱーっ!

「ねえ!あんた!待ちなさいっ!」

…ん？なんかきた？って！おお！赤いぜかまし！また美少女だ！受け身もお見事！

「風神のご加護があらんことを。わたしは西風騎士団の偵察騎士、アンバーよ」

アンバーちゃん、かわゆす。ところで騎士さまが何かご用？

「あんだ、モンドの人じゃないよね？身分の証明は出来る？」

「落ち着いて、怪しいものじゃないんだ…」

パイモンさんや、それ怪しい人が言うセリフやで？

” こんにちは、ホタルだ”

「…ここら辺の地域じゃ、めずらしい名前ね… それからその… マスコットはなんなの？」

” 友達だ”

▶?”非常食だ”

「全然違う！マスコット以下じゃないか！」

いや、あんな選択肢用意する方が悪い！

アンバーちゃんが言うには近頃大きな龍が出没してこの辺りは危ないんだそうだ。それってさっきのヤツかな？あらやだ事件の元凶かよ！おまけに任務の片手間にワタシを見張るとはこれまた器用な…：…へえ、騎士にマニユアルってあるんだ…

YOUは何しにモンドへ？生き別れの兄を探すためサ！…ところでどこへ行くんだい？つとなんだアレ？…ゴブリン？コボルト？

「あつ！『ヒルチャール丘々人』!？」

「最近、荒野の化け物が城に近付いてきてるの」

なるほど、エネミー討伐。近付いてきてるってことは普段はもっと遠くに巣を作ったりするのかな。となると、例のドラゴンの影響かな？何はともあれサクサクつと倒しましょう！これくらいの敵なら斬って斬って吹き飛ばす！ほら、楽ちん♪アンバーもいい腕をしている。

「ふう、楽勝楽勝♪でも、あんだも戦えるなんて思わなかった」

アレくらいなら楽勝ですよ。ハル○タンの超マ巨大ガボスとか星喰ダーク○アルスい

のエ○ダーさんとかソロ討伐してたんで。

さあ、終わったしモンドへ案内してもらおうか！

To Be Continued...

え？料理？鍋で作るの？え！？串焼きだよね！？鍋で作んの
!!!???

旅ズレ短編集 そのさん

《季節のイベント》

《そのいち お年玉》

「お年玉、ですか？」

璃月港のとある場所で旅人はそんな言葉を発した。

「ああ、お前には色々世話になったからな。年も明けたしこう言つた形で礼をと思つてな」

「先生もこう言つてる事だし遠慮なく受け取つてあげなよ。俺もあげるからさ」

2人の発言に旅人は目を丸くした。

鍾離先生のお財布

「え？タルタリヤだけでなく鍾離先生からも貰えるの!? 大丈夫？」

タルタリヤのお財布破産しない？」

「相棒は俺からいくら貰うつもりなのかな？」

あとへんなルビが見えたぞ？とツツコミを入れつつ金貨袋を手渡

タルタリヤ

す公子。旅人はその重みからおおよその金額を計算していたが、口

10万モラくらいかなあ

に出すのも野暮なので一言お礼を言つてポケツトに仕舞い込んだ。

アイテムボックス

「旅人、俺からはこれだ」

「鍾離先生もありがとうござ……つてあれ？」

鍾離から袋を受け取つた旅人はその軽さに首を傾げる。中身がな
いのだ。内心でお財布タルタリヤのことを考えつつ鍾離を見上げる。

「鍾離先生、あの……」

「幾ら欲しい？」

その言葉を聞いて旅人は硬直した。そうだ、彼は岩王帝君だ。モラを作り出すなんて造作もないことだ。軽い口調で聞かれたとはいえ今からもらえるお金は謂わば神から貰えるお金な訳で……

「遠慮するな、言い値を出そう」

「せ、先生。外の世界にも同じような文化がありませんか？」

旅人は必死に説明した。身振り手振りまで入れ全力で、普段なら知ったことかと投げ捨てる常識を。大人から子供に渡す適正金額と

は。

そして、

「10,000モラ、これだけでいいのか？別に俺はもっ「いいえ！先生から貰えると言う事実だけでも十分です！ご自身が何者なのかを理解してください！」そ、そうか」

鍾離から貰った袋にお金が入ると旅人は袋の口をしつかりと閉じアイテムボックスのコレクション類に大事そうにしまった。

《そのに バレンタイン》

「やあ旅人！ボクだよ！明日はなんの日か知ってるかい!？」

「ウエンティィ？どうしたの？テンション高過ぎない？酔った？」

出会い頭に急にテンションMAXで話しかけてきたウエンティィと困惑顔の旅人。明日はなんの日か、明日？えっと、今日は2月の13日だから…

「2月の14日、煮干の日に（2）ぼ（棒、つまり1）し（4）だね」

「旅人!？」

「あれ？違った？じゃあふんどしの日ふん（2）ど（10）し（4）？」

「ちよつと!？」

期待の眼差しで見るウエンティィに対して同日の記念日で返す旅人。痺れを切らしたウエンティィはたまらず叫ぶ。

「違うでしょ！明日はバレンタインデー！女性が男性にチョコを配る日!!」

「…この間のお年玉といいバレンタインといいどうやってティワツトに流れてきたんだ？」

別の世界のイベントに対して全力なウエンティィを見て旅人は頭を抱えた。よくよく考えたら今日街でみた男性は皆ソワソワしていたように見える。旅人は溜息を一つ吐き、いいですか？と前置きをしてウエンティィに説明をした。

「バレンタインデーというのは本来別世界のイベントで、とある宗教

の司祭ウアレ^パンテイヌ^{レン}スが処刑された日です。かつて愛する人を故郷に残した兵士がいると士気が下がるという理由で兵士たちの婚姻を禁止した皇帝がいて、その事で悲しんでいた兵士たちを憐れみ内緒で結婚式をあげていたのがウアレ^パンテイヌ^ス。そのことに怒った皇帝から2度とするなど命令されたにもかかわらず彼は毅然として命令に屈しなかった為、最終的に処刑されました。処刑日の2月14日はとある女神の祝日であり翌日の祭りや、彼自身の行ってきたことをとって恋人たちの日となったのが一般論。そして長い年月が経ち、男性も女性も花やカードなどの贈り物を親しい人や恋人に贈る日となりましたとさ」

「そ、そうなんだ」

「ちなみに女性が男性にチョコレートを贈るって言う文化は同じ世界のとある島国で生まれたもので時を経て『告白用』の本命チョコ、『恋人までは行かないが良き友人として』贈る義理チョコ、『同性(主に女性同士)』で贈り合う友チョコ、『自分用』の自己チョコなどさまざまな派生があるよ」

「へ、へえ・・・」

旅人はかなり詳しい説明により若干引き気味なウエンテイ。そんな彼を気にすることなく旅人は言葉を紡ぐ。

「この世界に流れてきたバレンタインはおそらくその島国発祥の文化かな? そうなると来月の14日はホワイトデーだね? バレンタインデーに贈り物もらった男性は、お返しは3倍にして渡すものだって聞いたことがあるよ?」

風神様の3倍返しってどれくらい凄いのかな? と笑う旅人にウエンテイは力なく笑った。

——翌日——

璃月港の街中を散歩していた公子は後ろから誰かが近づいていることに気がついた。振り返るとそこには息を切らした旅人がいた。「おや? 相棒じゃないか、どうしたんだい? そんなに息を切らして」

「夕、タルタリヤー！こ、これあげるーじ、じゃあね!!」

旅人は早口に捲し立てると公子に袋を手渡し足早に去っていった。公子は暫く唾然としていたが何かに気付いたのか小さく笑った。

「なるほど、今日はそうだったね」

今日は2月14日、どこからか流れ込んできた異国の文化、女性が気のある異性にチョコレートを贈る日だとか。旅人の顔が少し赤かったのは走ってきたからか、それとも？

「ハハ♪それにしてもあの旅人がねえ…」

悪戯っぽく笑いながら公子は袋を開け中を見て、そして固まった。中に入っていたのは一枚の手紙、

”今日は女性から男性に贈り物を贈る日、贈り物をもらった男性は来月に3倍にしてお返しをすると聞いたので…”

と袋いっぱいのお金^{モラ}だった。

公子は暫く固まっていたが、やがて笑顔のまま走り出した。

旅人が逃げた方角へ。

「相棒うううー！ちよつとお話しようかあ!!!」

《ここからはいつもの短編》

《なんとか天君》

望舒旅館の近くで邪気を纏ったヒルチャールを見かけた旅人たちが、近くでどこかで見つけたことのある札を使ってヒルチャールを追い払う仮面を被った人を見つけた。

「礼には及ばぬ。魔を退治し世を救うは仙人の本分、言及する価値もなし…」

仙人を名乗る男性に対し旅人とパイモンは名乗る。

「なるほど、では吾輩も名乗るのが礼儀であろう。ゴホンツ…吾輩は ”^{たっせいかくしんてんくん}星攫辰天君”、信者たちには ”星辰天君” と呼ばれている。世を救うため下界に降りてきた。ここで会ったのも何かの縁、

願いがあつたらば吾輩に言つてみるがいい」

願いを叶えると言ふ言葉に驚くパイモン、無理もない。いままで出会つてきた仙人は先の魔人戦で大暴れしたし降魔大聖である？は言わずもがな、半仙である甘雨もその戦闘能力は高い。パイモンの中で仙人とは、荒事を得意とする奴となつていた。

そんなパイモンを見ていた旅人だったがやがて後ろを振り返ると一言。

「だ、そうですよ？みなさん」

旅人が振り返つた先にいたのは…

「あんな仙人いたかしら？」

訝しげになんとか天君を見つめる璃月七星の一人、刻晴と

「ほう…」

俺の知らない新しい仙人かと興味を抱く往生堂の客卿、鍾離（岩王帝君）と

「……………」

なんとか天君を睨みつける半仙の甘雨と降魔大聖の？がいた。

タルタリヤと夢の中

ここはテイワット大陸の璃月。岩神と仙人の庇護の下、璃月七星と呼ばれる実力者によって治められている国である。最近色々あって岩神と仙人の庇護が無くなったが、今も変わらず活気に溢れた港街である。

「んで？天賦素材のために週一でぶっ飛ばされているタルタルソース君は、ワタシに何の用かな？」

「タルタリヤだ。相棒を呼んだのは少し相談したい事があってね」

そんな璃月港の万民堂に旅人はいた。向かいに座る男性はフアデュイの執行官、公子・タルタリヤ。天賦素材兼聖遺物爽やかな好青年であり、たまに武器鍛造素材もドロップしてくれる弟を溺愛している。家族想いで、優しいお兄ちゃんだが、週一で旅人にしかれる戦闘狂という一面を持つ。

「… 何でかな、今相棒に喧嘩を売られた気がしたよ」

「… 気のせいじゃないかな？それよりも相談って？」

普段璃月でのんびりしてるかと思えばたまに旅についてくる彼が相談事とは珍しい。少し興味を持った旅人は彼の相談とやらを聞くことにした。

「少し前に鍾離先生から相棒のことを聞いたんだけど、いろんな世界を旅してたそうじゃないか」

「そうだね。観光してただけの世界や戦いに明け暮れた世界なんかもあったね」

「そこで、相棒の旅した世界の戦い方とか、武器とか、何か参考になるものはないかと思ってね」

戦闘の幅を広げたいんだと語るタルタルはどこか期待した目で旅人を見る。

「異世界の戦い方を参考にしたいねえ… 武器はこの世界の文明レベル的に無理だろうけど戦い方ならまあ…」

それなら別にいいかな、と呟いた旅人だったが何かを思い出した表情をするとでもなあ、と渋り始めた。

「おや、教えてくれないのかい？」

「いや、教えるのは別に構わないんだけどね？ワタシってほら、この世界に来てから力をいろいろ失ってるじゃん。だから普通の動きができるかわからないよ？」

どうしたもんかなあ、とウンウン唸る旅人だったが思わぬところから助けが入る。

「なあ旅人、あの世界なら本気出せるんじゃないか？」

「あの世界？」

「オイラがたまに見る夢の世界だ」

パイモンの発言にタルタルソースは首を傾げるが旅人はなんとなく理解したようだ。夢の世界とはパイモンが度々迷い込む場所で、他世界を旅していた旅人と出会うことの出来る場所だ。しかし、

「確かにあの世界なら本来の力も出せるだろうけど、今のところパイモン限定で行ける場所じゃない？」

「興味深い話だけど、俺と相棒がそこに行けなきやダメだな。何かキツカケとかはないのかい？」

本気の旅人と戦えるのなら何でもいいやとパイモンにキツカケを尋ねるタルタリあ。パイモンは暫く考えていたがやがて、

「多分アレだ！旅人と一緒に寝てる時だぞ」

「なるほど、意識が混ざり合って出来る可能性か。。。って、ちよつと待って！」

「おい非常食ウ！言い方ア!!」

特大の爆弾を投下しやがった。

「お、お、おチビちゃん？それはつまり俺と相棒に、一緒寝ろって言うことかい？」

「??? そうだぞ？」

冷や汗をかき始めた公子の質問にパイモンは何か問題でも？と返す。

「パイモン、モラルやセクハラって言葉を知ってるかい？」

「オイラだってそれくらい知ってるぞ！旅人にはあつてないようなものだろ！それにタル蚩とかデイル蚩とかカップリングイラストに「いいね♡」連打してるの知ってるんだぞ！何も問題はないはずだ！」

「それはイラストだから許されることであってリアルワタシだったら問題だろうが！」

旅人の普段の行動にツツコミを入れるパイモンと2次元の話題にリアルを持つてくるなどキレる旅人。その後も暫くワーワーギャーギャーと騒ぎ続け、通報を受けてやってきた千岩軍に説教された。

なんやかんやありまして
＜閑話休題＞

そして時間は夜、場所は宿屋の一室。

「タルタルこれ大丈夫？フアデュイの執行官が年下の女の子と寝たつて噂立ったら社会的に死ぬよ？」

「他の執行官や部下達には絶対にバレたくないね。もちろん、家族にもね」

「ワタシのお兄ちゃんにバレた日には命日になるね」

「なんか頭痛くなってきたんだけど。まあいい、これ以上不毛な言い合いをしても始まらないよ。諦めて寝るとしよ……う!!」

噂ひとつで身が滅びかねない状態でグロツキーになつていたとは言えタルタリヤはフアデュイの執行官、そんな彼がバチンという音の後に突然倒れてしまった。あまりにも突然なことにパイモンは驚いたが旅人が布に巻いた何かを持つていることに気がついた。

「た、旅人？オマエそれ……なんだ？」

「これ？電気水晶。タルタルの神の目が水だからかな？いやあ、よく効くねえ」

旅人が持っていたそれは電気水晶と言い、モンドのあちこちで多く採掘できる水晶である。素手で触れると感電するため注意が必要だ。そんな危険物を使ってタルタリヤを昏倒させた旅人は、どこからともなくロープを取り出してタルタリヤの腕と胴を縛る。

「よし、ここまですれば何も心配はないね！じゃあパイモン、おやすみ」

「何が安心なんだろうか…… ってもう寝てるし！」

宿屋の一室、そこにはロープで縛られた哀れな青年と穏やかな顔で眠る少女、そしてツツコミ疲れた小さな案内人がいたのだった。

そして、

>Side：タルタリヤ

「おや、ここはどこかな？おチビちゃんも相棒の姿もない、それどころか人の気配すらないな」

目が覚めたタルタリヤは現在見知らぬ森の中にいた。周囲の植物は見たこともない種類であり聞こえてくる動物の声も聞いたことのないものだった。

「仕方ない、どこかに人がいないか探しに行こうかな」

ぼやくように呟くと歩き始める。

暫く歩いていると地響きと共に大きく毛深い生物が襲い掛かってきた。

「おっと、危ないなあ。いきなりなんだい君は？ヒルチャール・岩兜の王デカブツに似ているが随分と毛深いね」

巨大生物の動きを警戒しつつ弓を取り出す。そして、

「おいおい、いきなり殴りかかってくる奴があるかい？それにしても随分と身軽だね？ジャンプして全身で押しつぶそうとしてくるなんてなかなか面白いじゃないか！」

巨大生物の拳を避け弓で牽制する。ダメージは受けているようだが怯むことなく攻撃を仕掛けてくる様子にタルタリヤは感心していた。巨大生物は拳が当たらないからか大きく飛び跳ねるとグルリと回転し、体を大きく広げるとそのまま落ちてきた。全身を使ったボディプレス回避し弓を放ち、隙あらば双剣で斬りつける。大ぶりな攻撃を回避し反撃し続けるタルタリヤ。やがて体力が尽きたのだろう。巨大生物はがくりと膝をつきそのまま倒れて動かなくなった。

「おや？もう終わりかい？運動にはちょうどいいけどさ、闘いとしては物足りなかったよ」

当たらなければどうと言うことはない、そうして余裕たっぷり伸びをするタルタリヤだがどこからか視線を感じ振り返る。そこには、
ピシッ パキンッ パキンッ

何か割れる音が響き目の前の空間が割れる、そして

「キシャアアアアアアアアア!!!」

空間を突き破って白く痩せ細った獣が現れた。タルタリヤはその様子に驚き暫く呆けていたが、やがて獰猛な笑みを浮かべる。

「へえ、これはなかなか楽しめそうだ…ねっ!!!」

先程の巨大生物とは比べ物にならない俊敏性、そしてそこから繰り出される素早い攻撃、そして極め付けは、

「キシャアアアアアアアアア!!!」

ギチギチ ギチギチ キュイイイイ

「おいおい、新手を呼び出すとはね。これは驚い…：…：… なんだ？身体が、引っ張られる!?!」

白い獣が腕を構えると、黒い球体が発生し、周囲のものを引き寄せ始める。タルタリヤはそれに抗っているが周囲に呼び寄せられた黒い虫のような生物は吸い込まれていって…

「呼び寄せた奴らを、喰ってるのか?」

やがて黒い球体を飲み込んだ白い獣は咆哮ひとつ。それだけで姿が変わった。腕には黒い棘が生え、背中には血を固めたかのような黒く細い骨のような翼、そして膨れ上がり青く発光する胸。パワーアップした獣は宙に浮くと黒い針のようなものを周囲に浮かべ、

「おっと！なかなか速い…：…ね！しかも爆発までするのか、厄介だな」

次々とタルタリヤに向けて射出してくる。かなりのスピードで放たれる黒い針は地面に刺さると爆発して周囲に散らばる。素早く回避はしていたが1つ、2つと傷が増える。負ける気はさらさらないが無事に勝てるかどうか怪しい。あの厄介な機動性をどうしたものかと考えていると。

「クーム・ドラゴン、初見さんにとっては面倒なのと遊んでるね?」

苦戦してるの? そんな声が聞こえたかと思うと白い獣の翼に赤い円のようなマークが浮かび上がり、閃光、翼が跡形もなく碎け散った。続け様に顔に円が浮かび、顔についた仮面が剥がれる。剥き出しになった顔に再び赤い円が浮かび上がると、

「エ〇ドアトラクト、これで終わり!」

青白い極光が獣の顔を貫き消し飛ばした。崩れ落ちた獣は赤黒い霞となって消えていった。

「やあタルタル、大丈夫かい？」

「相棒かい？どう攻めるべきか悩んでたから正直助かった……よ」
タルタリヤが攻めあぐねていた敵をたつた3回の攻撃で消しとばす。その事実^に冷や汗をかきつつ聞き覚えのある声に振り返り、固まった。そこにいたのは、

「君、本当に相棒かい？」

「失敬な、タルタルから禁忌滅却の札をもらった可愛い可愛い旅人さんですよ？」

「いや、俺の知る君とは随分と姿が違うからね」

「……ああ、そう言うことか。この世界だとかなり変化してるんだつたね」

背丈が低いのは変わらないが真っ白な肌に真っ白な髪、同じく白いベレー帽を被り白い^{アイエフフ}上着^{ソンド・雪}を羽織り目を白い布で覆い隠した全身真っ白な少女が青白い^{オフ}長い^{ティア}弩^アのような物を肩に担いで立っていた。

「随分と変わった姿だね？見えているのかい？」

「見えていない（目は）けど見えている（TPS視点）」

なんとも言えない返しをした旅人は武器を消し小さな声で何かを呟いた。

「それにしても夢の中だからか、即座にクラス変更が可能なのはやりやすい」

「……？俺にはよく分からないけど、相棒の戦い方が見えるんだよね？だったら善は急げだ！さあやろう！すぐやろう！」
「ちよっ！おま！このバトルジャンキーめ！」

＞Side：旅人

EMERGENCY CODE

〔DUEL〕

タルタリヤが笑顔で放った矢を同じく弓を構え相殺する。地面を滑るように迫ってくる水弾も氷魔術^{パ○タ}を使って無力化する。彼は弓で

は埒があかないと判断したのだろう、双剣に切り替え突撃してくる。

「クラス変更、F i H u」

「さあさあ！存分に踊ろうじゃないか！」

左右からの素早い連撃を同じく双少剣へと切り替え一つ一つ確実に防ぐ。相手が距離をとったら武器を即座に槍へ切り替え突アサトバスター進、そのまま剛拳に切り替え懐に潜り込み裏バックハートスマッシュ拳を叩き込む。

「あつははは♪いいねえ！楽しいねえ！弓に双剣に槍だなんて、相棒はなんでもうまく使いこなすなあ！」

「バクスマで沈めるつもりだったのによく防いだよ…ね！」

「どんな距離でも武器を切り替えて対応してくる相棒だからね、油断できないよー！」

「それはどうも！F i H uからH u F iへ」

大剣を使って突ギル○イブレイク進、即座に槍に切り替え相手の双剣の連撃を同じく連ティ○スクリッド撃で防ぎ、最後の一撃で吹き飛ばし距離を取る。

「距離をとったところで弓じゃお互い通じないだろう？」

「わかってる。だからこうする。クラス変更、R a T e」

距離をとった旅人はカードタリスをタルタリヤの近くに投げる。それは周囲のものを引き寄せ始める。吸い込まれて逃げられなくなったタルタリヤに長銃を構え5本の追尾弾ホーミン○エミッション・霽式を放つ。追尾弾が爆発しあたりが煙で見えなくなる。しかし旅人は心眼ターゲットロックを外していないで確実に捉えていた。

「クラス変更、B r H u」

旅人は小さく呟くと地面を滑るように動くとタルタリヤとすれ違いざまに素早く一閃グッ。

「今回はワタシの勝ちだよ」

背後をとった旅人はそのまま技を派生させ強力な一撃を叩き込み意識を刈り取る。

倒れたタルタリヤはやがて光の粒子となり消えていった。

「ふむ、そろそろ朝か。タルタルは先に起きたみたいだね」

夢の中とはいえこれだけの激闘だったのだ。寝覚めは最悪だろう。

「気は進まないけどワタシも起きないとね」

そう言っつて伸びを一つ。旅人の姿もまた光の粒子となって消えて

い
っ
た。
。

旅ズレ短編集 そのよん

旅人からの手紙

拝啓 観測者様

お久しぶりです。私です、旅人の蛭です。

旅に仕事に冒険に、とイベントがたくさんあったおかげで忙しくまともに筆を取ることもできませんでした。最近ようやく落ち着いたのでこうやって筆をとった次第です。ご心配をおかけしました。

さて、時がたち、モンドや璃月をあちらこちらと旅する内に様々なことがありましたね。

璃月ではピン婆やと再会し煙緋を紹介されたり、お手伝いをして不思議な壺『塵歌壺』を貰いました。

モンドではダインと再会しアビス教団を追い回し、思いがけない人と再会しました。

そして季節は夏へと移り変わり、クレーやジン団長、バーバラさんと謎の群島『金リンゴ諸島』での謎解きバカンスなんかもありましたね。まさかトワリンをタクシー代わりに使わせてもらえるとは思いませんでした。

怒涛のイベントラッシュに戸惑っていたら遂に始まってしまいました稲妻編！

訳あってまたお尋ね者になってしまい、忙しい日々はまだまだ続きますが少しばかり落ち着いたのでまた皆様に私の旅の話ができたならなあと思っています。

観測者様の世界も大変なのだど風の噂で聞きました。この時期は体調を崩しやすいとも聞きますのでどうかお大事に。

それでは、またお会いしましょう。

敬具

「旅人、何書いてるんだ？」

「んん？ちよつとしたお手紙だよ」

続・探索人権真君

ここはテイワット大陸から隔絶された箱庭世界『塵歌壺』。その中にある大きな屋敷、ここにはモンド、璃月、稻妻、さまざまな国出身の人物が出入りしている。そんな中、屋敷の主人である旅人がポツリと呟いたことから物語は始まる。

「1人、また1人と探索人権真君が消えていく…。」

「旅人？どうしたんだ急に？」

机に突っ伏した旅人の呟く声が聞こえ、パイモンが反応する。旅人は顔を上げると静かに言葉を紡いでいく。

「いやね？今まで色んなイベントがあっただじゃん？アビスの使徒やら塵歌壺やら、金リンゴ諸島やら…。」

「そうだな、色々あったな」

「こういう言い方をするのも変な感じに思うだろうけどさ、物語が進んでいく内にまた色々バグができなくなったよね？」

「… またバグなのか（呆れ）」

「アルベド先生の疑似陽華タパルトは言わずもがな、謎のぶっ飛びを見せる刻晴のライアーバグとか空を駆ける旅人^{ワタシ}とかさ？」

「またオイラの知らない名称が出てきたぞ？」

バグだから修正されるのは仕方ないんだけどね？とため息をつく旅人。

「そうになると正規の手段を有効活用するわけで、まあカタパルトが無くなってもある程度の高さなら余裕なアルベド先生とか短・中距離水上移動のモナちゃんとか、ちよつと無茶な崖登りや長距離飛行に万葉君とか、踏氷渡海真君のガイアとか」

「あれ？渡海真君は甘雨にするーって前言ってなかったか？」

「意外とタイミングがシビアなのと海の凍結時間のこと考えるとやっぱりガイアが踏氷渡海真君にふさわしかったんだよね」

甘雨の2段階チャージショットやスキルは凍らせる範囲も広く渡海に便利かと当初は思ったが水面を凍らせている時間が意外と短く長距離を渡る術としては不向きなのであった。その点ガイアのスキ

ルは水面の凍結時間が長く、更にCTは凍結時間より短い為余程のことがない限り無限に海上を歩くことができるのである。しかし、「そっか、ってんん？旅人、今『ふさわしかった』って言ったか？過去形なのか？」

「いやまあたしかにのんびり進む手段としてはガイアは踏氷渡海真君として優秀なのよ？でもさ？もつと優秀な子と稲妻で知り合ってしまったじゃん！」

「そんなやついたか？… ってもしかして綾華か？」

神里綾華、稲妻で出会った少女であり氷の神の目を持っている。ダッシュの移動方法がモナと同じであり更に、

「綾華のダッシュ終了時に周囲に氷元素を付与、更に剣にも氷元素を付与され剣を振れば水面を凍らせる、スキルはCTが長いけど凍結時間の長い氷を展開できる。この二つを組み合わせればほぼ無限に海を渡る上にガイア以上の速度で進むことができるんだよ！」

「そう考えるとたしかに探索とかには優秀だな！」

ウェーブボートがあるとはいえ離島の多い稲妻ではまさに便利な移動手段、更に綾華はアタッカーが本業である。強い上に移動まで優秀、まさに完璧！

「となるとガイアは、また20時間の鉱石採取要員として動いてもらいますか」

「旅人、それ綾華に会う前からずっとやってることだぞ？」

「ほーう、お前さんはまた反省室にぶち込まれたいらしいな？」

「… ヒエ」

旅人は再び西風騎士団の反省室にぶち込まれるのであった。

アタッカー

それはある日のこと、今日も今日とて旅人は仲間と共に進化素材を集めていた。

「無相の炎ゴルア！ぶちのめしてやらあ！宵宮の進化素材を集めないといけないんじゃないけど…、まだきてないけど！」

「旅人、あまり無理をするな。今バリアを貼る」

「旅人さん、相手は炎属性なのですから私とバーバラさんに任せてください！」

「荣誉騎士、あまり無理しちやダメだよ？ほら、回復してあげる」

今回の相手は無相の炎、序盤は燃え盛る敵を水元素で鎮火し、再び燃え上がる前に高火力のキャラで倒してしまうのが一般的だ。

ダメージが通るようになった敵に綾華が斬りかかる。

「まだ育成途中ですからあまり火力は出せませんが！」重撃・融解 9
000ダメージ×3

「通常攻撃で火力が出るのは羨ましいな、俺はコレでしかダメージを出せん」元素爆発・結晶 53000ダメージ

露出したコアに鍾離が隕石を落とす。

そしてバーバラが、

「わ、2人ともすごい！私も負けないぞー」重撃・蒸発 40000
ダメージ

無相の炎を消しとばした。

重撃・蒸発 40000ダメージ

「た、旅人？オイラの見間違いか？今バーバラがとんでもないダメージを出した気がしたぞ？」

「俺も見ていた。彼女は回復や支援に特化した人物だと認識していたがコレは… 凄まじいな」

パイモンと鍾離はバーバラの高火力に興味津々のようだ。旅人は暫く目を閉じていたが何かを思い出したのかポンと手を打った。

「ああ、そういえば少し前に熟知強化されたって聞いて楽団4セット強化済みにしたの忘れてた」

アタッカーバーバラ、楽しいです。

「でもまだ納得してないから聖遺物厳選はまだまだ続くよ」

「旅人の目からハイライトが消えてしまったぞ…」

旅ズレ短編集 そのご

旅人と元素力

「… おや、旅人がモンドに戻ってきたようだね。やっぱり爺さんのいる国は肌合わなかったのかな？」

風を操る吟遊詩人は旅人の気配を感じタダウパの谷へと向かっていった。旅人は少し前にモンドで起きた事件を解決した1人であり、彼の友であるトワリンを救ってくれた恩人でもある。とある神を探すために各地を旅しているらしく、モンドでの事件解決後、手掛かりを求めて隣国『璃月』へと向かったはずであった。向こうで何かトラブルに見舞われたのか、それとも単に向こうのお堅い雰囲気が自由な旅人の肌合わなかったのか、できれば後者の方が望ましい。かの神の元へ遊びに行った時にも煽り散らしてやろうと彼は考えていた。

好肉族の大鍋付近で彼女を見つけ声をかけようとしたが、

「おーい！旅びと…」

「先生っ！先生っ！コレがこの前言ってた好肉族の大鍋ですよ！これなら夜泊石の良し悪しとかわかるんじゃないですか？」 ダキツキ

「ふむ、たしかにこの大きさなら十二分に役割を果たせるだろう。ところで何故君は先程から腕に絡みついてくるのか」

「先生と一緒にならダメージ減多に受けないからですよ！まさに鉄壁！素敵!!大好き!!!岩元素サイコー!!!」

吟遊詩人はイチヤコラしている2人に呆気に取られていた。よく見ると旅人の元素も風から岩に変わっている。そして旅人が腕を絡める若い男、姿が変わっても間違えるはずはない、彼は、いや、奴は！

「う、浮気だああああ!!!」

その日、モンド全域に吟遊詩人の叫び声が響き渡った。

ひとくちテイワット

☆テウセル

「お兄ちゃんだ！お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

「この声… まさか！ああ、テウセルだ！… おや、旅人じゃないか。弟を送ってくれてありがとう」

テウセルと戯れていた『公子』タルタリヤは旅人に礼を言うがどこか彼女の様子がおかしいことに気がついた。

「ううん、いいよ。ふふ、可愛いシヨト… 弟だね？ジュル、私に気にせず続きをどうぞ、ジュル…」

「… 相棒、少し頭を冷やしてきたほうがいいよ？女の子がしちやいけない顔になっている」

☆兄との再会

「蛭、心配することはないさ、旅の果てで僕たちはまた出会うから」

「空、お兄ちゃん、どうして…」

転移するためのゲートなのだろう、兄は私に背を向けゲートを潜ろうとし、

「… ああ、一つ忘れていたよ。ねえ、蛭？」

兄は振り返り私の目の前まで近づいてきた。

「な、何かな？空？」

「… フレンド登録いいかい？ああ、塵歌壺の訪問許可も」

「ストーリー進まないからはよ帰れ」

私はとりあえずなんか言ってる兄をゲートに放り込んだ。

☆旅人とエナドリ

「ゴクツ、ゴクツ、ぷはあ！… つくうー！」ダンツ

「た、旅人？今日もエナドリ飲んでるのか？」

「… これがないとイベントはおろかデイリーすらやる気出ない」

「お、おう…。それにしても旅人はそのブランド好きだな、昨日はピンク色飲んでたし、今朝は黄色のやつ飲んでた。今は黒いやつだ」

「ここんとこ毎日飲んでる、塵歌壺の冷蔵庫にまだ10本はあるよ？」

「お、おう（呆れ）。いいか、旅人？エナド리는1日2本まで、一度飲んだら6時間は間隔を空けるよ？」

「わかってるわかってる！さ、このブランドは今日2本飲んだし次は

翼を授けるヤツを飲もうかな?」カシユツ、グビグビ…

「おい!!全然分かってないじゃないかあ!!」

☆エージェントなんか

『璃月によるこそ、4〇。璃月はテイワット大陸最大の貿易港であり、世界共通の貨幣『モラ』の造幣局がある唯一の国よ。年に一度、七星迎仙儀式という儀式が行われ、岩神モラクスが璃月の経営方針についての神託を下すそうよ。今回のターゲットはその岩神モラクス、璃月では岩王帝君と呼ばれているようね。正確にはその岩神の持つ『神の心』を手に入れてほしいの。何に使うのかはまだわからないけど非常に重要な任務だから失敗は許されないわ』

『ところで今年の迎仙儀式は儀式中に岩神が何者かによって殺害されてしまったそうよ。遺体からでも神の心は確保できるようだから確実に手に入れるように…。神託により繁栄を謳歌する『神と共にある地』、その神がいなくなったこの国は今後どう変わっていくのかしらね?』

「…ねえ、相棒?」

『準備は一任するわ』…なに?タルタリヤ?」

「なに?じゃないよ、君は一体なにをやってるんだい?神の心を巡る事件はもう終わったじゃないか。それに4〇って誰さ?」

『凄腕の暗殺者』エージェント・4〇』のオペレーターごっこ。4〇は暗殺以外なんでもできる男」

「…それは暗殺者と言っついていいんだらうか?」

☆旅人と稲妻訪問

「この離島を離れるには許可証をもらわないといけないらしいぞ?」

「なんか勘定奉行のこの娘さんが手を貸してくれるって」

「何か手伝わされるんじゃないか?あの爺さんが言っつてたみたいの手紙とか」

「H A H A H A、まさかそんなことが…」

〈数分後〉

「あの、手紙を、届けてほしいんです」

「……………」（ポカーン）」

「あ、あの、旅人さん、パイモン、帰るよ、璃月かモンドに帰ろう」ちよ、ちよと待つてくださいお願いします！話だけでも!!」

その後なんとか交渉は成功し、旅人は渋々手紙を持って稲妻本土へと降り立ったのであった。

☆旅人と2. 1

旅人は椅子に座り何かの書類に目を落としている。

「ふむ、ピックアップに雷電將軍に九条沙羅、珊瑚宮さんか、そして新しいエリアにエリアボスが数体とあのおば……………淑女にクソガキ……………散兵か」

「旅人、何読んで……………ってそれ次のアップデのスケジュールか？」

「そうだよパイモン……………って！初回チャージ、リセットだ?!……………くそ！今月も厳しいのに！そうまでして私の財布を軽くしようと言うのか！」（財布からお札を取り出す）

「旅人！早まるな！まだ先のことだぞ、今のうちからお金を入れようとするんじゃない！」

☆旅人と新武器？

「旅人、少しいいか？例のスケジュールを見ていたら妙なを見つけただが、流石にこれは冗談だよな？」

ディルックが見せたのは次のアップデのスケジュールが書かれた書類の一枚、そこには配布される予定の武器が書かれているのだがそれはどう見ても……………

「見事なまでにマグロですね、旦那の元素爆発でこんがり焼けるんですかね？」

「焼けるかどうかはともかく、これは武器として成り立つ物なのか？」

困惑しているディルックをよそに旅人はアイテムボックスからあるものを取り出した。

「…旅人、それはなんだ？」

「昔宇宙蛮族に所属していたときに振り回してた両手剣だよ？その名も、スペ〇ス・ツナと冷〇ツナ」

「…すでに異世界で実用化されていたのか…」

デイルツクの中からハイライトが消えたのは言うまでもない…

おいでませ弊ワット その1

申請が許可されました。弊ワット時空へと移行します。

ここはテイワット大陸、契約と商人の国「璃月」。中心都市である璃月港から少し離れた場所を旅人は歩いていった。

パ「なあ、旅人はどこへ向かってっているんだ？」

蛍「もうすぐ着くよ。えっと、黄金屋かな？そこにいるんだって」

パ「…黄金屋？あのファデュイの執行官にでも会いに行くの？」

パイモンに尋ねられ旅人は答える。目指すは黄金屋、そこに誰かがいるらしい。黄金屋といえばファデュイの執行官、『公子』タルタリヤがいる場所である。旅人も週1で通い素材を貰いに行っている。しかし今週はもう貰ったはずだ。

パ「公子に会いに行くわけじゃない？じゃあ一体誰が…」

黄金屋の扉の前に到着。パイモンがそう疑問を口にした時、その扉がゆつくりと開く。そこには、

タ「いやあ相変わらず強いね、前より倒すスピード早くなった？」

？「聖遺物も天賦も日々いじくりまわしてるんだ、早くなってるよ、早く困る」

すでにボロボロになったタルタリヤと、

タ「それもそうか、じゃあはい、今週の分」

？「ドーモ、どれどれ？…おい！また武器鍛造素材ないじゃん！いい加減ちようだいよ！弓のやつ！」

タ「はっはっは、中身はランダム！お楽しみつてやつだよ。また来週試してくれ」

そんなタルタリヤに文句を言う旅人がいた。

パ「え!?旅人!?いやでも旅人はオイラの横に…でも、え？」

？「まったく、破魔の弓を作るのはいつになることやr…ん？」

パイモンの驚いた声に黄金屋から出て来た旅人が反応する。

タ「おや、君のお友達が来たみたいだね、俺はそろそろ行くよ」

? 「おいたタルタル！来週はよこせよ！北陸弓の原型！… さて、お待たせ、待ったかい？」

蛍「ううん、今来たところさ」

パ「…なんだそのカツプルのやりとりみたいないな挨拶」

こちらに気づいて声をかけてきた旅人と返事をする旅人、その姿はどちらも同じでその見分けはつかない。双子と言われても納得することだろう。もつとも、本来の双子は兄である空の筈だが。

? & 蛍 「ああ、パイモン？落ち着いてくれ、ちゃんと説明するから」

パ「うわあ！一緒に喋るな！頭がおかしくなりそうぞぞ！」

急にシンクロしだした旅人sに脳がバグリそうになったパイモン。

旅人sは笑っていたがやがてお互い向き合い、

A「ようこそ弊ワットへ、ホタルchan♪」

蛍「お邪魔するよA r i s a、ワタシのオリジナルさん♪」
A r i s a
旅人と旅人、2人は改めて挨拶をすると握手を交わした。

パ「んん？弊ワット？オリジナル？なんのことだ？」

A「その前に、お互い同じ姿じゃ混乱するだろう？少し待ってくれ」
A r i s aはそう言うとかつて潜入捜査の真似事をしたときに手に入れたフェアデュイ構成員の仮面を付けた。これで見分けがつくだろう？と笑う姿は悪役っぽく見える。

パ「うわあ、なんか悪役感が増したぞ？」

蛍「アツハツハ♪いいよA r i s a、最高にCOOLだ。旦那と暴れてた時期が懐かしいよ！」

A「ウククク、たしかに懐かしいが過去の振り返りは一度あの海岸に戻ってからだよ。我々がテイワットに来て1年が過ぎたんだ。あの時と同じように旅してみようじゃないか」

A r i s aはそう言うとうープマーカを起動した。

原神1周年おめでとう!!!

9月28日をもって原神は1周年を迎えました。

作者はリリース初日からプレイはしていますが色々あつて活動日数は362日なのがちょっと悔しい。

初めてモンドの景色を見た時の感動を、元素の力を手に入れた時の興奮をみんなは覚えていますか？

—————旅ズレtips—————

ワープマーカーを起動して訪れたのはモンドの星落ちの谷、

A「蛭、覚えているかい？」

蛭「私たちの旅はこの海岸から始まった…でしょ？」

A「うん、そしてすぐに1度溺れ死んだんだよ」

蛭「…あつたなあ(汗)」

ワープマーカーに初めて触れた後、崖を登らずに海へ向かい、スタミナが切れるまで泳ぎ続けた。何ができるのか、どこまでやれるのか、それが知りたかっただけなんだ。

A「さて、初っ端の行動も思い出したところで七天神像に向かおうか」

ワープマーカー横の崖を登り、谷の間を道なりに進むと視界が開ける。そこから見えるのは、

蛭「なあA r i s a？ここはいつ見てもいい景色だよな」

A「湖に浮かぶ七天神像、遠くに見えるモンドの街。初めて見た時はあまりの美しさに感動したし、これから冒険が始まるんだと興奮したよ」

蛭「…でもその直後に落下死したんだよね」

… 台無しである。

A「あれはほら、行くぞ！って言いながら消えたパイモンが悪い」

パ「おい！オイラのせいか!?ぼーっとしてた旅人のが悪いだろ！」

A & 蛭「それはそう」

3人は談笑しつつ崖を降り。七天神像を横切り、モンド城へと到着した。街の中を歩き、風神像の前に辿り着く。

A「ここで初めて風の翼を手に入れたんだよなあ。そしてそのまま

最初のトワリン戦へ」

蛍「アクシヨンしてると思ったら急にシューティングが始まったよね」

A「で、追い払ったらガイア登場！あれよあれよと騎士団本部に連れてかれ、リサやアンバーたちと四風守護の神殿に調査に行ったんだよな」

蛍「そしてその後我ら旅人は・・・」

A「ウククク、あの頃はまだ好奇心旺盛だったからね。調査後、璃月のマップを解放しに行ったよ」

蛍「急に璃月向かったよな。風龍廃墟に向かったのは璃月全域を解放した後だったっけ？」

パ「うげ、嫌なこと思い出したじゃないか。あのときはオイラの言うことひとつも聞かずに気になった場所をあっちこっち走り回ってモンドのみんなすごい迷惑かけたんだぞ！」

クツクツと笑いながら語るArisaに当時を懐かしみながら相槌を打つ蛍。

パイモンはかつて自分のガイドを完全に無視して璃月に直行した蛍を思い出し顔を顰めた。風魔龍の件で大変だ、モンドを守らないと！と息巻いていた蛍が急に向こうには何があるのかなと道を逸れ石門を抜け璃月全域を旅し始めたのだ。当然モンドでの調査はストツプし、蛍がモンドに戻ったのはおよそ半月後、扱う元素も岩になって帰ってきた。もし風魔龍が再びモンド城に現れたらきつと大変なことになっていただろう。しかし風魔龍はどうやら律儀に待っていてくれたらしいし、帰ってきた蛍を見た騎士団の面々は表情を引き攣らせていた。

ちなみに、Arisa^{作者}が璃月の地に足を踏み入れたのはリリース翌日の29日である。これはひどい。

A「あれのせいでストーリー全部を進める前にマップをできる限り開放するのが癖付いてしまってね、稲妻も最初のお使いイベントが終わって自由に動けるようになった途端『鳴神島』から『ヤシオリ島』までの全ワープマーカを解放しに向かったよ」

蛍「おい、ストーリー進めろよ」

A「今はちゃんと終わってるとも。メインストーリーはな？」

蛍「キヤラストは？」

A「心海ちゃんがまだです。でも璃月でイベント始まったから後でね？」

イベント終わったらやりますよ？ええ、もちろんです。

城下町をしばらく散歩した後、3人は再び外へと向かいモンド領内を歩き始める。

蛍「ここで香菱と出会ったんだよね？」

A「隠しアチーブメントのためにこの辺りのイノシシに轢かれまくったな…」

清泉町へ、

蛍「この葡萄畑で晶蝶狩り尽くしたよな…」

A「わっちはメイドさんの謎肉ステーキが怖かった思い出があるよ」

アカツキワイナリーへ、西へ東へうろろと、やがて明冠山地を抜け、風龍廃墟へと到着した。

A「さて、ひとまずモンド散策は一旦ここでストップしよう」

蛍「… ドラスパは？」

A「璃月編終わった後の解放だから今はスルー。でも極寒ゲージが嫌いだからあまり行きたくない」

ストーリーや収集、厳選以外では正直行きたくない。

蛍「風龍廃墟といえばストーリー的な意味でも我々の旅的な意味でもラストな場所だよね？」

A「んん？… あー、失われた風神の瞳だっけ？そーいや最後の1個はここで手に入れたな」

蛍「岩神の瞳もそうだけどき、1個だけ余ったのよね？」

アイテム欄にいまだに残ってます。なんならドラスパの緋紅玉髄は2個余ってる。

2人の旅人は七天神像に腰掛け思い出話を続けた。アンバーが弓を構えたまま空を歩き出したとか、ウエンティに空中から撮ってもら

おうとカメラを渡したら何故か上へ上へと飛び続け、降りてきたと思ったら今度は床を抜けて行ったとか、アルベド先生の疑似陽華タパルトにはお世話になったとか、バグな話が多かったがまあいつものことだろう。

やがてあたりは暗くなり、空には月が浮かび星々が煌めき始める。

蛍「ふわあ… 随分と話し込んでしまったね？ 璃月へはどうしようか、A r i s a？」

A「くああ… 明日以降でいいんじゃないかな？ 別に1日で済ませうってわけじゃないし…」

A r i s aはそう言うのとゴロリと横になってしまった。

A「それじゃあおやすみ、次は石門に集合しようか」

蛍「おやすみ、また今度ねー」

メールマルチプレイを退出しました。元のゲーム進捗に戻ります。